

サムエル記下

第一章 サウルが死んだ後、ダビデはアマレクびとを撃つて帰り、ふつかの間チクラグにとどまっていたが、二三日目となって、ひとりの人が、その着物を裂き、頭に土をかぶって、サウルの陣営からきた。そしてダビデのもとにきて、地に伏して拝した。三ダビデは彼に言った、「あなたはどこからきたのか」。彼はダビデに言った、「わたしはイスラエルの陣営から、のがれてきたのです」。四ダビデは彼に言った、「様子はどうかであつたか話しなさい」。彼は答えた、「民は戦いから逃げ、民の多くは倒れて死に、サウルとその子ヨナタンもまた死にました」。五ダビデは自分と話している若者に言った、「あなたはサウルとその子ヨナタンが死んだのを、どうして知ったのか」。六彼に話している若者は言った、「わたしは、はからずも、ギルボア山にいましたが、サウルはそのやりによりかかつており、戦車と騎兵とが彼に攻め寄ろうとしていました。七その時、彼はうしろを振り向いてわたしを見、わたしを呼びましたので、『ここにいます』とわたしは答えました。八彼は『おまえはだれか』と言いましたので、『アマレクびとです』と答えました。九彼はまたわたしに言いました、『そばにきて殺してくだ

さい。わたしは苦しみに耐えない。まだ命があるからです』。二そこで、わたしはそのそばにいつて彼を殺しました。彼がすでに倒れて、生きることのできないのを知ったからです。そしてわたしは彼の頭にあつた冠と、腕につけていた腕輪とを取って、それをわが主のもとに携えてきたのです」。

二そのときダビデは自分の着物をつかんでそれを裂き、彼と共にいた人々も皆同じようにした。三彼らはサウルのため、またその子ヨナタンのため、また主の民のため、またイスラエルの家のために悲しみ泣いて、夕暮まで食を断つた。それは彼らがつるぎに倒れたからである。四ダビデは自分と話していた若者に言った、「あなたはどこの人ですか」。彼は言った、「アマレクびとで、寄留の他国人の子です」。五ダビデはまた彼に言った、「どうしてあなたは手を伸べて主の油を注がれた者を殺すことを恐れなかったのですか」。六ダビデはひとりの若者を呼び、「近寄って彼を撃て」と言った。そこで彼を撃つたので死んだ。七ダビデは彼に言った、「あなたの流した血の責めはあなたに帰する。あなたが自分の口から、『わたしは主の油を注がれた者を殺した』と言って、自身にむかつて証拠を立てたからである」。

八ダビデはこの悲しみの歌をもつて、サウルとその子ヨナタンのために哀悼した。——「ハこれは、ユダの人々に教えるための弓の歌で、ヤシャルの書にしるされてい

る。——彼は言った、

「一」イスラエルよ、あなたの栄光は、

あなたの高き所で殺された。

ああ、勇士たちは、ついに倒れた。

「二」ガテにこの事を告げてはいけない。

アシケロンのちまたに伝えてはならない。

おそらくはペリシテびとの娘たちが喜び、

割礼なき者の娘たちが勝ちほこるであろう。

「三」ギルボアの山よ、

露はおまえの上におりるな。

死の野よ、

雨もおまえの上に降るな。

その所に勇士たちの盾は捨てられ、

サウルの盾は油を塗らずに捨てられた。

「三」殺した者の血を飲まずには、

ヨナタンの弓は退かず、

勇士の脂肪を食べないでは、

サウルのつるぎは、むなしくは帰らなかった。

「三」サウルとヨナタンとは、愛され、かつ喜ばれた。

彼らは生きるにも、死ぬにも離れず、

わしよりも早く、

ししよりも強かった。

「四」イスラエルの娘たちよ、サウルのために泣け。

彼は緋色の着物をもって、

はなやかにあなたがたを装い、

あなたがたの着物に金の飾りをつけた。

「二五」ああ、勇士たちは戦いのさなかに倒れた。

ヨナタンは、あなたの高き所で殺された。

「二六」わが兄弟ヨナタンよ、あなたのためわたしは悲しむ。

あなたはわたしにとって、いとも楽しい者であった。

あなたがわたしを愛するのは世の常のようではなく、

女の愛にもまさっていた。

「二七」ああ、勇士たちは倒れた。

戦いの器はうせた。

第二章 「この後、ダビデは主に問うて言った、

「わたしはユダの一つの町に上るべきでしょうか」。主は

彼に言われた、「上りなさい」。ダビデは言った、「どこへ

上るべきでしょうか」。主は言われた、「ヘブロンへ」。

「二」そこでダビデはその所へ上った。彼のふたりの妻、エ

ズレルの女アヒノアムと、カルメルびとナバルの妻で

あったアビガイルも上った。三ダビデはまた自分と共に

いた人々を、皆その家族と共に連れて上った。そして彼

らはヘブロンに住んだ。四時にユダの人々がきて、

その所でダビデに油を注ぎ、ユダの家の王とした。

人々がダビデに告げて、「サウルを葬ったのはヤベシ・

ギレアデの人々である」と言ったので、五ダビデは使者

をヤベシ・ギレアデの人々につかわして彼らに言った、

「あなたがたは、主君サウルにこの忠誠をあらわして彼

を葬った。どうぞ主があなたがたを祝福されるように。六どうぞ主がいまあなたがたに、いつくしみと真実を示されるように。あなたがたが、この事をしたので、わたしもまたあなたがたに好意を示すであらう。七今あなたがたは手を強くし、雄々しくあれ。あなたがたの主君サウルは死に、ユダの家がわたしに油を注いで、彼らの王としたからである。

八さてサウルの軍の長、ネルの子アブネルは、さきにサウルの子イシボセテを取り、マハナイムに連れて渡り、彼をギレアド、アシユルびと、エズレル、エフライム、ベニヤミンおよび全イスラエルの王とした。九サウルの子イシボセテはイスラエルの王となった時、四十歳であつて、二年の間、世を治めたが、ユダの家はダビデに従つた。一〇ダビデがヘbronにいてユダの家の王であつた日数は七年と六か月であつた。

二ニネルの子アブネル、およびサウルの子イシボセテの家来たちはマハナイムを出てギベオンへ行つた。三ゼルヤの子ヨアブとダビデの家来たちも出ていつて、ギベオンの池のそばで彼らと出会い、一方は池のこちら側に、一方は池のあちら側にすわつた。四アブネルはヨアブに言つた、「さあ、若者たちを立たせて、われわれの前で勝負をさせよう」。ヨアブは言つた、「彼らを立たせよう」。五こうしてサウルの子イシボセテとベニヤミンびととのために十二人、およびダビデの家来たち十二人を

数えて出した。彼らは立つて進み、六おのおの相手の頭を捕え、つるぎを相手のわき腹に刺し、こうして彼らは共に倒れた。それゆえ、その所はヘルカテ・ハヅリムと呼ばれた。それはギベオンにある。七その日、戦いはひじょうに激しく、アブネルとイスラエルの人々はダビデの家来たちの前に敗れた。

八その所にゼルヤの三人の子、ヨアブ、アビシヤイ、およびアサヘルがいたが、アサヘルは足の早いこと、野のかもしかのようなものであつた。九アサヘルはアブネルのあとを追つていつたが、行くのに右にも左にも曲ることなく、アブネルのあとに走つた。一〇アブネルは後をふりむいて言つた、「あなたはアサヘルであつたか。アサヘルは答えた、「わたしです」。一〇アブネルは彼に言つた、「右か左に曲つて、若者のひとりをつかえ、そのよろいを奪いなさい」。しかしアサヘルはアブネルを追うことをやめず、ほかに向かうともしなかつた。二アブネルはふたたびアサヘルに言つた、「わたしを追うことをやめて、ほかに向かいなさい。あなたがたを地に撃ち倒すことなど、どうしてわたしにできようか。それをすれば、わたしはどうしてあなたの兄ヨアブに顔を合わせることができようか」。三それでもなお彼は、ほかに向かうことを拒んだので、アブネルは、やりの石突きで彼の腹を突いたので、やはりその背中に出了。彼はそこに倒れて、その場で死んだ。そしてアサヘルが倒れて死んでいる場所に來

る者は皆立ちとどまつた。

二四 しかしヨアブとアビシャイとは、なおアブネルのあとを追ったが、彼らがギベオンの荒野の道のほとり、ギアの前にあるアンマの山にきた時、日は暮れた。二五 ベニヤミンの人々はアブネルのあとについてきて、集まり、一隊となつて、一つの山の頂に立った。二六 その時アブネルはヨアブに呼ばわつて言った、「いつまでもつるぎをもつて滅ぼそうとするのか。あなたはその結果の悲惨なのを知らないのか。いつまで民にその兄弟を追うことをやめよと命じないのか」。二七 ヨアブは言った、「神は生きておられる。もしあなたが言いださなかったならば、民はおのおのその兄弟を追わずに、朝のうちに去つていたのである」。二八 こうしてヨアブは角笛を吹いたので、民はみな立ちとどまつて、もはやイスラエルのあとを追わず、また重ねて戦わなかった。

二九 アブネルとその従者たちは、夜もすがら、アラバを通つて行き、ヨルダンを渡り、昼まで行進を続けてマハナイムに着いた。三〇 ヨアブはアブネルを追うことをやめて帰り、民をみな集めたが、ダビデの家来たち十九人とアサヘルとが見当らなかった。三十一 しかし、ダビデの家来たちは、アブネルの従者であるベニヤミンの人々三百六十人を撃ち殺した。三十二 人々はアサヘルを取り上げてベツレヘムにあるその父の墓に葬った。ヨアブとその従者たちは、夜もすがら行つて、夜明けにヘブロンに着いた。

第三章

「サウルの家とダビデの家との間の戦争は久しく続き、ダビデはますます強くなり、サウルの家はますます弱くなった。」

ニヘブロンでダビデに男の子が生まれた。彼の長子はエ

ズレルの女アヒノアムの産んだアムノン、三その次はカルメルびとナバルの妻であつたアビガイルの産んだキレアブ、第三はゲシュルの王タルマイの娘マアカの子アブサロム、四第四はハギテの子アドニヤ、第五はアビタルの子シパテヤ、五第六はダビデの妻エグラの産んだイレアム。これらの子がヘブロンでダビデに生まれた。

六サウルの家とダビデの家とが戦いを続けてゐる間に、アブネルはサウルの家で、強くなつてきた。七さてサウルには、ひとりのそばめがあつた。その名をリヅバといひ、アヤの娘であつたが、イシボセテはアブネルに言つた、「あなたはなぜわたしの父のそばめのところにはいなかったのですか」。八アブネルはイシボセテの言葉を聞き、非常に怒つて言つた、「わたしはユダの犬のかしらですか。わたしはきよう、あなたの父サウルの家と、その兄弟と、その友人とに忠誠をあらわして、あなたをダビデの手に渡すことをしなかったのに、あなたはきよう、女の事のあやまちを挙げてわたしを責められる。九主がダビデに誓われたことを、わたしが彼のためになし遂げないならば、神がアブネルをいくえにも罰せられるように。一〇すなわち王国をサウルの家から移し、ダビデの位をダンか

らベエルシバに至るまで、イスラエルとユダの上に立たせられるであろう」。二 イシボセテはアブネルを恐れたので、ひと言も彼に答えることができなかった。

三 アブネルはヘブロンにいるダビデのもとに使者をつかわして言った、「国はだれのものですか。わたしと契約を結びなさい。わたしはあなたに力添えして、イスラエルをことごとくあなたのものにしましょう」。四 ダビデは言った、「よろしい。わたしは、あなたと契約を結びましょう。ただし一つの事をあなたに求めます。あなたがきてわたしの顔を見るとき、まずサウルの娘ミカルを連れて来るのでなければ、わたしの顔を見ることはできません」。五 それからダビデは使者をサウルの子イシボセテにつかわして言った、「ペリシテびとの陽の皮一百をもつてめとったわたしの妻ミカルを引き渡しなさい」。六 そこでイシボセテは人をやって彼女をその夫、ライシの子バルテルから取ったので、七 その夫は彼女と共に行き、泣きながら彼女のあとについて、バホルムまで行ったが、アブネルが彼に「帰って行け」と言ったので彼は帰った。

八 アブネルはイスラエルの長老たちと協議して言った、「あなたがたは以前からダビデをあなたがたの王とすることを求めていましたが、今それをしなさい。主がダビデについて、『わたしのしもべダビデの手によって、わたしの民イスラエルをペリシテびとの手、およびもろ

もろの敵の手から救い出すであろう』と言われたからです」。九 アブネルはまたベニヤミンにも語った。そしてアブネルは、イスラエルとベニヤミンの全家が良いと思うことをみな、ヘブロンでダビデに告げようとして出発した。

一〇 アブネルが二十人を従えてヘブロンにいるダビデのもとに行つた時、ダビデはアブネルと彼に従っている従者たちのために酒宴を設けた。一一 アブネルはダビデに言った、「わたしは立つて行き、イスラエルをことごとく、わが主、王のもとに集めて、あなたと契約を結ばせ、あなたの望むものをことごとく治められるようにいたしましょう」。こうしてダビデはアブネルを送り帰らせたので彼は安全に去って行つた。

一二 三ちようどその時、ダビデの家来たちはヨアブと共に多くのぶんどり物を携えて略奪から帰ってきた。しかしアブネルはヘブロンでダビデのもとにはいなかった。ダビデが彼を帰らせて彼が安全に去ったからである。一三 ヨアブおよび彼と共にいた軍勢がみな帰ってきたとき、人はヨアブに言った、「ネルの子アブネルが王のもとにきたが、王が彼を帰らせたので彼は安全に去った」。一四 そこでヨアブは王のもとに行つて言った、「あなたは何をなさったのですか。アブネルがあなたの所にきたのに、あなたははどうして、彼を返し去らせられたのですか。一五 ネルの子アブネルがあなたを欺くためにきたこと、そして

あなたの出入りを知り、またあなたのなさっていることを、ことごとく知るためにきたことをあなたはごぞんじです」。

二六 ヨアブはダビデの所から出てきて、使者をつかわし、アブネルを追わせたので、彼らはシラの井戸から彼を連れて帰った。しかしダビデはその事を知らなかった。

二七 アブネルがヘブロンに帰ってきたとき、ヨアブはひそかに語ろうといつて彼を門のうちに連れて行き、その所で彼の腹を刺して死なせ、自分の兄弟アサヘルの血を報いた。二八 その後ダビデはこの事を聞いて言った、「わたしとわたしの王国とは、ネルの子アブネルの血に関して、主の前に永久に罪はない。二九 どうぞ、その罪がヨアブの頭と、その父の全家に帰するように。またヨアブの家には流出を病む者、らい病人、つえにたよる者、つるぎに倒れる者、または食物の乏しい者が絶えないように」。三〇 こうしてヨアブとその弟アビシャイとはアブネルを殺したが、それは彼がギベオンの戦いで彼らの兄弟アサヘルを殺したためであつた。

三一 ダビデはヨアブおよび自分と共にいるすべての民に言った、「あなたがたは着物を裂き、荒布をまとい、アブネルの前に嘆きながら行きなさい」。そしてダビデ王はその棺のあとに従った。三二 人々はアブネルをヘブロンに葬った。王はアブネルの墓で声をあげて泣き、民もみな泣いた。三三 王はアブネルのために悲しみの歌を作つて

言った、

「愚かな人の死ぬように、
アブネルがどうして死んだのか。」

三三 あなたの手は縛られず、
足には足かせもかけられないのに、
悪人の前に倒れる人のように、
あなたは倒れた」。

そして民は皆、ふたたび彼のために泣いた。三五 民はみなきて、日のあるうちに、ダビデにパンを食べさせようとしたが、ダビデは誓つて言った、「もしわたしが日の入る前に、パンでも、ほかのものでも味わうならば、神がわたしをいくえにも罰せられるように」。三六 民はみなそれを見て満足した。すべて王のすることは民を満足させた。三七 その日すべての民およびイスラエルは皆、ネルの子アブネルを殺したのは、王の意思によるものでないことを知った。三八 王はその家来たちに言った、「この日イスラエルで、ひとりの偉大なる將軍が倒れたのをあなたがたは知らないのか。三九 わたしは油を注がれた王であるけれども、今日なお弱い。ゼルヤの子であるこれらの人々はわたしの手におえない。どうぞ主が悪を行う者に、その惡にしたがつて報いられるように」。

第四章

一 サウルの子イシボセテは、アブネルがヘブロンで死んだことを聞いて、その力を失い、イスラエルは皆あわてた。二 サウルの子イシボセテにはふた

りの略奪隊の隊長があつた。ひとりの名はバアナ、他のひとりの名はレカブといつて、ベニヤミンの子孫であるペロテびとリンモンの子たちであつた。(それはペロテもまたベニヤミンのうちに数えられているからである。三ペロテびとはギッタイムに逃げていつて、今日までその所に寄留している)。

四 さてサウルの子ヨナタンに足のなえた子がひとりあつた。エズレルからサウルとヨナタンの事の知らせがきた時、彼は五歳であつた。うばが彼を抱いて逃げたが、急いで逃げる時、その子は落ちて足なえとなつた。その名はメビボセテといつた。

五 ペロテびとリンモンの子たち、レカブとバアナとは出立して、日の暑いころイシボセテの家に来たが、イシボセテは昼寝をしていた。家の門を守る女は麦をあおぎ分けていたが、眠くなって寝てしまった。そこでレカブとその兄弟バアナは、ひそかに中に入つた。彼らが家にはいつた時、イシボセテは寝室で床の上に寝ていたので、彼らはそれを撃つて殺し、その首をはね、その首を取つて、よもすがらアラバの道を行き、ハイシボセテの首をヘブロンにゐるダビデのもとに携えて行つて王に言った、「あなたの命を求めたあなたの敵サウルの子イシボセテの首です。主はきよう、わが君、王のためにサウルとそのすえとに報復されました」。九 ダビデはペロテびとリンモンの子レカブとその兄弟バアナに答えた、

「わたしの命を、もろもろの苦難から救われた主は生きておられる。一。わたしはかつて、人がわたしに告げて、『見よ、サウルは死んだ』と言つて、みずから良いおとずれを伝える者と思つていた者を捕えてチクラグで殺し、そのおとずれに報いたのだ。二。悪人が正しい人をその家の床の上で殺したときは、なおさらのことだ。今わたしが、彼の血を流した罪を報い、あなたがたを、この地から絶ち滅ぼさないでおくであらうか」。三。そしてダビデは若者たちに命じたので、若者たちは彼らを殺し、その手足を切り離し、ヘブロンの池のほとりで木に掛けた。人々はイシボセテの首を持って行つて、ヘブロンにあるアブネルの墓に葬つた。

第五 章 イスラエルのすべての部族はヘブロンにゐるダビデのもとにきて言つた、「われわれは、あなたの骨肉です。二。先にサウルがわれわれの王であつた時にも、あなたはイスラエルを率いて出入りされました。そして主はあなたに、『あなたはわたしの民イスラエルを牧するであらう。またあなたはイスラエルの君となるであらう』と言われました」。三。このようにイスラエルの長老たちが皆、ヘブロンにゐる王のもとにきたので、ダビデ王はヘブロンで主の前に彼らと契約を結んだ。そして彼らはダビデに油を注いでイスラエルの王とした。四。ダビデは王となつたとき三十歳で、四十年の間、世を治めた。五。すなわちヘブロンで七年六か月ユダを治め、また

エルサレムで三十三年、全イスラエルとユダを治めた。
 六王とその従者たちとはエルサレムへ行つて、その地の住民エブスびとを攻めた。エブスびとはダビデに言った、「あなたはけつして、ここに攻め入ることはできない。かえつて、めししいや足なえでも、あなたを追ひ払うであろう」。彼らが「ダビデはここに攻め入ることはできない」と思つたからである。七ところがダビデはシオンの要害を取つた。これがダビデの町である。八その日

ダビデは、「だれでもエブスびとを撃とうとする人は、水をくみ上げる縦穴を上つて行つて、ダビデが心に憎んでゐる足なえやめししいを撃て」と言つた。それゆゑに人々は、「めししいや足なえは、宮にはいつてはならない」と言いならわしている。九ダビデはその要害に住んで、これをダビデの町と名づけた。またダビデはミロから内の周囲に城壁を築いた。一〇こうしてダビデはますます大いなる者となり、かつ万軍の神、主が彼と共におられた。

二ツロの王ヒラムはダビデに使者をつかわして、香柏および大工と石工を送つた。彼らはダビデのために家を建てた。三そしてダビデは主が自分を堅く立ててイスラエルの王とされたこと、主がその民イスラエルのためにその王国を興されたことを悟つた。

三ダビデはヘブロンからきて後、さらにエルサレムで妻とそばめを入れたので、むすこと娘がまたダビデに生れた。四エルサレムで彼に生れた者の名は次のとおりで

ある。シャンムア、シヨバブ、ナタン、ソロモン、一五イブハル、エリシユア、ネベグ、ヤピア、一六エリシヤマ、エリアダ、およびエリベレテ。

一七さてペリシテびとは、ダビデが油を注がれてイスラエルの王になつたことを聞き、みな上つてきてダビデを捜したが、ダビデはそれを聞いて要害に下つて行つた。一八ペリシテびとはきて、レバイムの谷に広がつてゐた。一九ダビデは主に問うて言つた、「ペリシテびとに向かつて上るべきでしょうか。あなたは彼らをわたしの手に渡されるでしょうか」。主はダビデに言われた、「上るがよい。わたしはかならずペリシテびとをあなたの手に渡すであらう」。二〇そこでダビデはバアル・ペラジムへ行つて、彼らをその所で撃ち破り、そして言つた、「主は、破り出る水のように、敵をわたしの前に破られた」。それゆゑにその所の名はバアル・ペラジムと呼ばれてゐる。二一ペリシテびとはその所に彼らの偶像を捨てて行つたので、ダビデとその従者たちはそれを運び去つた。

二二ペリシテびとが、ふたたび上つてきて、レバイムの谷に広がつたので、三ダビデは主に問うたが、主は言われた、「上つてはならない。彼らのうしろに回り、バアルサムの木の前から彼らを襲いなさい。四バアルサムの木の上に行進の音が聞えたならば、あなたは奮い立たなければならぬ。その時、主があなたの前に出て、ペリシテびとの軍勢を撃たれるからである」。二五ダビデは、主が命

じられたようにして、ペリシテびとを撃ち、ゲバからゲゼルに及んだ。

第六章

一 ダビデは再びイスラエルのえり抜きの人三万人をことごとく集めた。二 そしてダビデは立つて、自分と共にいるすべての民と共にバアレ・ユダへ行つて、神の箱をそこからかき上ろうとした。この箱はケルビムの上に座しておられる万軍の主の名をもって呼ばれている。三 彼らは神の箱を新しい車に載せて、山の上にあるアビナダブの家から運び出した。四 アビナダブの子たち、ウザとアヒオとが神の箱を載せた新しい車を指揮し、ウザは神の箱のかたわらに沿い、アヒオは箱の前に進んだ。五 ダビデとイスラエルの全家は琴と立琴と手鼓と鈴とシンバルとをもって歌をうたい、力をきわめて、主の前に踊った。

六 彼らがナコンの打ち場にきた時、ウザは神の箱に手を伸べて、それを押えた。牛がつまずいたからである。七 すると主はウザに向かって怒りを発し、彼が手を箱に伸べたので、彼をその場で撃たれた。彼は神の箱のかたわらで死んだ。八 主がウザを撃たれたので、ダビデは怒った。その所は今日までペレヅ・ウザと呼ばれている。九 その日ダビデは主を恐れて言った、「どうして主の箱がわたしの所に来ることができようか」。一〇 ダビデは主の箱をダビデの町に入れることを好まず、これを移してガテびとオベデエドムの家に運ばせた。二 神の箱はガテび

とオベデエドムの家に三か月とどまつた。主はオベデエドムとその全家を祝福された。

三 しかしダビデ王は、「主が神の箱のゆえに、オベデエドムの家とそのすべての所有を祝福されている」と聞き、ダビデは行つて、喜びをもって、神の箱をオベデエドムの家からダビデの町にかき上った。四 主の箱をかく者が六歩進んだ時、ダビデは牛と肥えた物を犠牲としてささげた。五 そしてダビデは力をきわめて、主の箱の前で踊った。その時ダビデは亜麻布のエポデをつけていた。六 こうしてダビデとイスラエルの全家とは、喜びの叫びと角笛の音をもって、神の箱をかき上った。

七 主の箱がダビデの町にはいった時、サウルの娘ミカルは窓からながめ、ダビデ王が主の前に舞い踊るのを見て、心のうちにダビデをさげすんだ。八 人々は主の箱をかき入れて、ダビデがそのために張った天幕の中のその場所に置いた。そしてダビデは燔祭と酬恩祭を主の前にささげた。九 ダビデは燔祭と酬恩祭をささげ終った時、万軍の主の名によって民を祝福した。一〇 そしてすべての民、イスラエルの全民衆に、男にも女にも、おのおのパンの菓子一個、肉一きれ、ほしぶどう一かたまりを分け与えた。こうして民はみなおのおのその家に帰った。

二〇 ダビデが家族を祝福しようとして帰ってきた時、サウルの娘ミカルはダビデを出迎えて言った、「きょうイスラエルの王はなんと威厳のあったことでしょう。いたず

ら者が、恥も知らず、その身を現すように、きょう家来たちののはしためらの前に自分の身を現されました。ミダビデはミカルに言った、「あなたの父よりも、またその全家よりも、むしろわたしを選んで、主の民イスラエルの君とせられた主の前に踊ったのだ。わたしはまた主の前に踊るであろう。三わたしはこれよりももっと軽んじられるようにしよう。そしてあなたの目には卑しめられるであろう。しかしわたしは、あなたがさきに言った、はしためたちに誉を得るであろう。三こうしてサウルの娘ミカルは死ぬ日まで子供がなかった。

第七章

一さて、王が自分の家に住み、また主が周囲の敵をことごとく打ち退けて彼に安息を賜わった時、二王は預言者ナタンに言った、「見よ、今わたしは、香柏の家に住んでいるが、神の箱はなお幕屋のうちにある。三ナタンは王に言った、「主があなたと共におられますから、行って、すべてあなたの心にあるところを行いなさい」。

四その夜、主の言葉がナタンに臨んで言った、五「行って、わたしのしもべダビデに言いなさい、『主はこう仰せられる。あなたはわたしの住む家を建てようとするのか。六わたしはイスラエルの人々をエジプトから導き出した日から今日まで、家に住まわず、天幕をすまいとして歩んできた。七わたしがイスラエルのすべての人々と共に歩んだすべての所で、わたしがわたしの民イスラ

エルを牧することを命じたイスラエルのさばきづかさのひとりに、ひと言でも「どうしてあなたがたはわたしのために香柏の家を建てないのか」と、言ったことがあるであろうか。八それゆえ、今あなたは、わたしのしもべダビデにこう言いなさい、『万軍の主はこう仰せられる。わたしはあなたを牧場から、羊に従っている所から取って、わたしの民イスラエルの君とし、九あなたがどこへ行くにも、あなたと共におり、あなたのすべての敵をあなたの前から断ち去った。わたしはまた地上の大いなる者の名のような大いなる名をあなたに得させよう。一〇そしてわたしの民イスラエルのために一つの所を定め、彼らを植えつけ、彼らを自分の所に住ませ、重ねて動くことのないようにするであろう。二また前のように、わたしがわたしの民イスラエルの上にさばきづかさを立てた日からこのかたのように、悪人が重ねてこれを悩ますことはない。わたしはあなたのもろもろの敵を打ち退けて、あなたに安息を与えるであろう。主はまた「あなたのために家を造る」と仰せられる。三あなたが日が満ちて、先祖たちと共に眠る時、わたしはあなたの身から出る子を、あなたのあとに立てて、その王国を堅くするであろう。四彼はわたしの名のために家を建て、わたしは長くその国の位を堅くしよう。五わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となるであろう。もし彼が罪を犯すならば、わたしは人のつえと人の子のむちを

もって彼を懲らす。一五しかしわたしはわたしのいつくしみを、わたしがあなたの前から除いたサウルから取り去ったように、彼からは取り去らない。一六あなたの家と王国はわたしの前に長く保つてであらう。あなたの位は長く堅うせられる。一七ナタンはすべてこれらの言葉のよ

うに、またすべてこの幻のようにダビデに語った。

一八その時ダビデ王は、はいつて主の前に座して言った、

「主なる神よ、わたしがだれ、わたしの家が何であるの

で、あなたはこれまでわたしを導かれたのですか。一九主

なる神よ、これはなおあなたの目には小さい事です。主

なる神よ、あなたはまたしもべの家の、はるか後の事を

語って、きたるべき代々のことを示されました。二〇ダビ

デはこの上なにあなたに申しあげることができましたよ

う。主なる神よ、あなたはしもべを知っておられるので

す。二一あなたの約束のゆえに、またあなたの心に従って、

あなたはこのもろもろの大きいなる事を行い、しもべにそ

れを知らせられました。二二主なる神よ、あなたは偉大で

す。それは、われわれがすべて耳に聞いたところによれ

ば、あなたのような者はなく、またあなたのほかに神は

ないからです。二三地のどの国民が、あなたの民イスラエ

ルのようでありましょうか。これは神が行って、自分の

ためにあがなって民とし、自らの名をあげられたもの、

また彼らのために大いなる恐るべきことをなし、その民

の前から国びととその神々を追ひ出されたものです。

二四そしてあなたの民イスラエルを永遠にあなたの民とし

て、自分のために、定められました。主よ、あなたは彼

らの神となられたのです。二五主なる神よ、今あなたが、

しもべとしもべの家について語られた言葉を長く堅う

して、あなたの言われたとおりにしてください。二六そう

すれば、あなたの名はとこしえにあがめられて、『万軍の

主はイスラエルの神である』と言われ、あなたのしもべ

ダビデの家は、あなたの前に堅く立つことができましよ

う。二七万軍の主、イスラエルの神よ、あなたはしもべに

示して、『おまえのために家を建てよう』と言われました。

それゆえ、しもべはこの祈をあなたにささげる勇気を得

たのです。二八主なる神よ、あなたは神にましまし、あな

たの言葉は真実です。あなたはこの良き事をしもべに約

束されました。二九どうぞ今、しもべの家を祝福し、あな

たの前に長くつづかせてくださるように。主なる神よ、

あなたがそれを言われたのです。どうぞあなたの祝福に

よって、しもべの家がながく祝福されますように」。

第三 八 章 一 この後ダビデはベリシテびとを撃つ

て、これを征服した。ダビデはまたベリシテびとの手か

らメテグ・アンマを取った。

二彼はまたモアブを撃ち、彼らを地に伏させ、なわを

もって彼らを測った。すなわち二筋のなわをもって殺す

べき者を測り、一筋のなわをもって生かしておく者を

測った。そしてモアブびとは、ダビデのしもべとなって、

みつぎを納めた。

三 ダビデはまたレホブの子であるゾバの王ハダデゼルが、ユフラテ川のほとりにその勢力を回復しようとして行くところを撃った。四 そしてダビデは彼から騎兵千七百人、歩兵二万人を取った。ダビデはまた一百の戦車の馬を残して、そのほかの戦車の馬はみなその足の筋を切った。五 ダマスコのスリヤびとが、ゾバの王ハダデゼルの助けるためにきたので、ダビデはスリヤびと二万二千人を殺した。六 そしてダビデはダマスコのスリヤに守備隊を置いた。スリヤびとは、ダビデのしもべとなつて、みつぎを納めた。主はダビデにすべてその行く所で勝利を与えられた。七 ダビデはハダデゼルのしもべらが持っていた金の盾を奪つて、エルサレムに持ってきた。八 ダビデ王はまたハダデゼルの町、ベタとペロタイから、ひじょうに多くの青銅を取った。

九 時にハマテの王トイは、ダビデがハダデゼルのすべての軍勢を撃ち破ったことを聞き、その子ヨラムをダビデ王のもとにつかわして、彼にあいさつし、かつ祝を述べさせた。ハダデゼルはかつてしばしばトイと戦いを交えたが、ダビデがハダデゼルと戦つてこれを撃ち破ったからである。ヨラムが銀の器と金の器と青銅の器を携えてきたので、ニダビデ王は征服したすべての国民から取つてささげた金銀と共にこれらをも主にささげた。三すなわちエドム、モアブ、アンモンの人々、ペリシテ

びと、アマレクから獲た物、およびゾバの王レホブの子ハダデゼルから獲たぶんどり物と共にこれをささげた。

三 こうしてダビデは名声を得た。彼は帰ってきてから塩の谷でエドムびと一万八千人を撃ち殺した。四 そしてエドムに守備隊を置いた。すなわちエドムの全地に守備隊を置き、エドムびとは皆ダビデのしもべとなった。主はダビデにすべてその行く所で勝利を与えられた。

五 こうしてダビデはイスラエルの全地を治め、そのすべての民に正義と公平を行った。六 ゼルヤの子ヨアブは軍の長、アヒルデの子ヨシヤパテは史官、七 アヒトブの子ザトクとアビヤタルの子アヒメレクは祭司、セラヤは書記官、八 エホヤダの子ベナヤはケレテびととペレテびとの長、ダビデの子たちは祭司であつた。

第九章 時にダビデは言った、「サウルの家の人で、なお残っている者があるか。わたしはヨナタンのために、その人に恵みを施そう」。二 さて、サウルの家にデバという名のしもべがあつたが、人々が彼をダビデのもとに呼び寄せたので、王は彼に言った、「あなたがデバか」。彼は言った、「しもべがそうです」。三 王は言った、「サウルの家の人がまだ残っていませんか。わたしはその人に神の恵みを施そうと思う」。デバは王に言った、「ヨナタンの子がまだおります。あしなえです」。四 王は彼に言った、「その人はどこにいるのか」。デバは王に言った、「彼はロ・デバルのアンミエルの子マキルの家に

おります」。五ダビデ王は人をつかわして、ロ・デバルのアンミエルの子マキルの家から、彼を連れてこさせた。六サウルの子ヨナタンの子であるメビボセテはダビデのもとにきて、ひれ伏して拝した。ダビデが、「メビボセテよ」と言ったので、彼は、「しもべは、ここにおります」と答えた。セダビデは彼に言った、「恐れることはない。わたしはかならずあなたの父ヨナタンのためにあなたに恵みを施しましょう。あなたの父サウルの地をみなあなたに返します。またあなたは常にわたしの食卓で食事をしなさい」。八彼は拝して言った、「あなたは、しもべを何とおぼしめして、死んだ犬のようなわたしを顧みられるのですか」。

九王はサウルのしもべザバを呼んで言った、「すべてサウルとその家に属する物を皆、わたしはあなたの主人の子に与えた。一〇あなたと、あなたの子たちと、しもべたちとは、彼のために地を耕して、あなたの主人の子が食べる食物を取り入れなければならない。しかしあなたの主人の子メビボセテはいつもわたしの食卓で食事をするのである」。ザバには十五人の男の子と二十人のしもべがあった。二ザバは王に言った、「すべて王わが主君がしもべに命じられるとおりに、しもべはいたしましょう」。こうしてメビボセテは王の子のひとりのようにダビデの食卓で食事をした。三メビボセテには小さい子があつて、名をミカといった。そしてザバの家に住んでいる者はみ

なメビボセテのしもべとなった。三メビボセテはエルサレムに住んだ。彼がいつも王の食卓で食事をしたからである。彼は両足ともに、なえていた。

第一〇章 一この後アンモンの人々の王が死んで、その子ハモンがこれに代って王となった。二そのときダビデは言った、「わたしはナハシの子ハモンに、その父がわたしに恵みを施したように、恵みを施そう」。そしてダビデは彼を、その父のゆえに慰めようと、しもべをつかわした。ダビデのしもべたちはアンモンの人々の地に行ったが、三アンモンの人々のつかさたちはその主君ハモンに言った、「ダビデが慰める者をあなたのもとにつかわしたのは彼があなたの父を尊ぶためだと思われませんか。ダビデがあなたのもとに、しもべたちをつかわしたのは、この町をうかがい、それを探つて、滅ぼすためではありませんか」。四そこでハモンはダビデのしもべたちを捕え、おのおの、ひげの半ばをそり落とし、その着物の中ほどから断ち切り腰の所までにして、彼らを帰らせた。五人々がこれをダビデに告げたので、ダビデは人をつかわして彼らを迎えさせた。その人々はひじょうに恥じたからである。そこで王は言った、「ひげがのびるまでエリコにとどまって、その後、帰りなさい」。

六アンモンの人々は自分たちがダビデに憎まれていることがわかったので、人をつかわして、ベテ・レホブのスリヤびととゾバのスリヤびととの歩兵二万人およびマ

アカの王とその一千人、トブの人一万二千人を雇い入れた。セダビデはそれを聞いて、ヨアブと勇士の全軍をつかわしたので、アンモンの人々は出て、門の入口に戦いの備えをした。ゾバとレホブとのスリヤびと、およびトブとマアカの人々は別に野にいた。

九 ヨアブは戦いが前後から自分に迫ってくるのを見て、イスラエルのえり抜き兵士のうちから選んで、これをスリヤびとに対して備え、そのほかの民を自分の兄弟アビシヤイの手になたして、アンモンの人々に対して備えさせ、二そして言った、「もしスリヤびとがわたしに手ごわいときは、わたしを助けてください。もしアンモンの人々があなたに手ごわいときは、行ってあなたを助けましょう。三 勇ましくしてください。われわれの民のため、われわれの神の町々のため、勇ましくしましょう。どうぞ主が良いと思われすることをされるように」。二三 ヨアブが自分と一緒にいる民と共に、スリヤびとに向かつて戦おうとして近づいたとき、スリヤびとは彼の前から逃げた。四 アンモンの人々はスリヤびとが逃げるのを見て、彼らもまたアビシヤイの前から逃げて町にはいつた。そこでヨアブはアンモンの人々を撃つことをやめてエルサレムに帰った。

二五 しかしスリヤびとは自分たちのイスラエルに打ち敗られたのを見て、共に集まった。二六 そしてハダデゼルは人をつかわし、ユフラテ川の向こう側にいるスリヤびと

を率いてヘラムにこさせた。ハダデゼルの軍の長シヨバクがこれを率いた。二七 この事がダビデに聞えたので、彼はイスラエルをことごとく集め、ヨルダンを渡ってヘラムにきた。スリヤびとはダビデに向かつて備えをして彼と戦った。二八 しかしスリヤびとがイスラエルの前から逃げたので、ダビデはスリヤびとの戦車の兵七百、騎兵四万を殺し、またその軍の長シヨバクを撃つたので、彼はその所で死んだ。二九 ハダデゼルの家来であった王たちはみな、自分たちがイスラエルに打ち敗られたのを見て、イスラエルと和を講じ、これに仕えた。こうしてスリヤびとは恐れて再びアンモンの人々を助けることをしなかった。

第一章 一 春になって、王たちが戦いに出るに及んで、ダビデはヨアブおよび自分と共にいる家来たち、並びにイスラエルの全軍をつかわした。彼らはアンモンの人々を滅ぼし、ラバを包囲した。しかしダビデはエルサレムにとどまっていた。

二 さて、ある日の夕暮、ダビデは床から起き出て、王の家の屋上を歩いていたが、屋上から、ひとりの女がからだを洗っているのを見た。その女は非常に美しくかった。三 ダビデは人をつかわしてその女のことを探らせたが、ある人は言った、「これはエリアムの娘で、ヘテびとウリヤの妻バテシバではありませんか」。四 そこでダビデは使者をつかわして、その女を連れてきた。女は彼の所

にきて、彼はその女と寝た。(女は身の汚れを清めていたのである。)こうして女はその家に帰った。五女は妊娠したので、人をつかわしてダビデに告げて言った、「わたしは子をはらみました」。

六そこでダビデはヨアブに、「ヘテびとウリヤをわたしの所につかわせ」と言つてやつたので、ヨアブはウリヤをダビデの所につかわした。セウリヤがダビデの所にきたので、ダビデは、ヨアブはどうしているか、民はどうしているか、戦いはうまくいっているかとたずねた。八そしてダビデはウリヤに言つた、「あなたの家に行つて、足を洗いなさい」。ウリヤは王の家を出ていったが、王の贈り物が彼の後に従つた。九しかしウリヤは王の家の入口で主君の家来たちと共に寝て、自分の家に帰りなかつた。一〇人々がダビデに、「ウリヤは自分の家に帰りませんでした」と告げたので、ダビデはウリヤに言つた、「旅から帰つてきたのではないか。どうして家に帰らなかつたのか」。二ウリヤはダビデに言つた、「神の箱も、イスラエルも、ユダも、小屋の中に住み、わたしの主人ヨアブと、わが主君の家来たちが野のおもてに陣を取つてゐるのに、わたしはどうして家に帰つて食い飲みし、妻と寝ることができましょう。あなたは生きておられます。あなたの魂は生きています。わたしはこの事をいたしません」。三ダビデはウリヤに言つた、「きょうも、ここにどまりなさい。わたしはあす、あなたを去らせま

しょう」。そこでウリヤはその日と次の日エルサレムにとどまつた。四ダビデは彼を招いて自分の前で食い飲みさせ、彼を酔わせた。夕暮になつて彼は出ていって、その床に、主君の家来たちと共に寝た。そして自分の家には下つて行かなかつた。

五朝になつてダビデはヨアブにあてた手紙を書き、ウリヤの手に託してそれを送つた。六彼はその手紙に、「あなたがたはウリヤを激しい戦いの最前線に出し、彼の後から退いて、彼を討死させよ」と書いた。七ヨアブは町を囲んでいたので、勇士たちがいると知つていた場所にウリヤを置いた。八町の人々が出てきてヨアブと戦つたので、民のうち、ダビデの家来たちにも、倒れるものがあり、ヘテびとウリヤも死んだ。九ヨアブは人をつかわして戦いのことをつぶさにダビデに告げた。一〇ヨアブはその使者に命じて言つた、「あなたが戦いのことをつぶさに王に語り終つたとき、二〇もし王が怒りを起して、『あなたがたはなぜ戦おうとしてそんなに町に近づいたのか。彼らが城壁の上から射るのを知らなかつたのか。三エルベセテの子アビメレクを撃つたのはだれか。ひとりの女が城壁の上から石を投げて彼をテベツで殺したのではなかつたか。あなたがたはなぜそんなに城壁に近づいたのか』と言われたならば、その時あなたは、『あなたのしもべ、ヘテびとウリヤもまた死にました』と言いなさい」。

三こうして使者は行き、ダビデのもとにきて、ヨアブが言いつかわしたことをことごとく告げた。三使者はダビデに言った、「敵はわれわれよりも有利な位置を占め、出てきてわれわれを野で攻めましたが、われわれは町の入口まで彼らを追い返しました。四その時、射手どもは城壁からあなたの家来たちを射ましたので、王の家来のある者は死に、また、あなたの家来ヘテびとウリヤも死にました。五ダビデは使者に言った、「あなたはヨアブにこう言いなさい、『この事で心配することはない。つるぎはこれをも彼をも同じく滅ぼすからである。強く町を攻めて戦い、それを攻め落しなさい』と。そしてヨアブを励ましなさい」。

三六ウリヤの妻は夫ウリヤが死んだことを聞いて、夫のために悲しんだ。三七その喪が過ぎた時、ダビデは人をつかわして彼女を自分の家に召し入れた。彼女は彼の妻となつて男の子を産んだ。しかしダビデがしたこの事は主を怒らせた。

第一二章 一主はナタンをダビデにつかわされた

ので、彼はダビデの所にきて言った、「ある町にふたりの人があつて、ひとりには富み、ひとりには貧しかった。二富んでいる人は非常に多くの羊と牛を持っていたが、三貧しい人は自分が買った一頭の小さい雌の小羊のほかに何も持っていなかった。彼がそれを育てたので、その小羊は彼および彼の子供たちと共に成長し、彼の食物を食べ、

彼のわんから飲み、彼のふところで寝て、彼にとっては娘のようであつた。四時に、ひとりの旅びとが、その富んでいる人のもとにきたが、自分の羊または牛のうちから一頭を取つて、自分の所にきた旅びとのために調理することを惜しみ、その貧しい人の小羊を取つて、これを自分の所にきた人のために調理した。五ダビデはその人の事をひじょうに怒つてナタンに言った、「主は生きておられる。この事をしたその人は死ぬべきである。六かつその人はこの事をしたため、またあわれまなかつたため、その小羊を四倍にして償わなければならない」。

七ナタンはダビデに言った、「あなたがその人です。イスラエルの神、主はこう仰せられる、『わたしはあなたに油を注いでイスラエルの王とし、あなたをサウルの手から救いだし、八あなたに主人の家を与え、主人の妻たちをあなたのふとこに与え、またイスラエルとユダの家をあなたに与えた。もし少なかったならば、わたしはもっと多くのものをあなたに増し加えたであらう。九どうしてあなたは主の言葉を軽んじ、その目の前に悪事をおこなつたのですか。あなたはつるぎをもつてヘテびとウリヤを殺し、その妻をとつて自分の妻とした。すなわちアンモンの人々のつるぎをもつて彼を殺した。一〇あなたがわたしを軽んじてヘテびとウリヤの妻をとり、自分の妻としたので、つるぎはいつまでもあなたの家を離れないであらう。一一主はこう仰せられる、『見よ、わたし

はあなたの家からあなたの上に災を起すであろう。わたしはあなたの目の前であなたの妻たちを取って、隣びとに与えるであろう。その人はこの太陽の前で妻たちと一緒に寝るであろう。二二あなたはひそかにそれをしたが、わたしは全イスラエルの前と、太陽の前にこの事をするのである。二三ダビデはナタンに言った、「わたしは主に罪をおかしました。ナタンはダビデに言った、「主もまたあなたの罪を除かれました。あなたは死ぬことはないでしょう。二四しかしあなたはこの行いによつて大いに主を侮ったので、あなたに生れる子供はかならず死ぬでしょう。二五こうしてナタンは家に帰った。

さて主は、ウリヤの妻がダビデに産んだ子を撃たれたので、病氣になった。二六ダビデはその子のために神に嘆願した。すなわちダビデは断食して、へやにはいり終夜地に伏した。二七ダビデの家の長老たちは、彼のかたわらに立って彼を地から起そうとしたが、彼は起きようとはせず、また彼らと一緒に食事をしなかった。二八七日目にその子は死んだ。ダビデの家来たちはその子が死んだことをダビデに告げるのを恐れた。それは彼らが、「見よ、子のなお生きてゐる間に、われわれが彼に語ったのに彼は死んだことを告げることができようか。彼は自らを害するかも知れない」と思ったからである。二九しかしダビデは、家来たちが互にささやき合うのを見て、その子の死

んだのを悟り、家来たちに言った、「子は死んだのか」。彼らは言った、「死なれました」。三〇そこで、ダビデは地から起き上がり、身を洗い、油をぬり、その着物を替えて、主の家にはいつて拝した。そのうち自分の家に行き、求めて自分のために食物を備えさせて食べた。三一家来たちは彼に言った、「あなたのなさったこの事はなんでしょうか。あなたは子の生きてゐる間はその子のために断食して泣かれました。しかし子が死ぬと、あなたは起きて食事をなさいました」。三二ダビデは言った、「子の生きてゐる間に、わたしが断食して泣いたのは、『主がわたしをあわれんで、この子を生かしてくださるかも知れない』と思つたからです。三三しかし今は死んだので、わたしはどうして断食しなければならぬでしょうか。わたしは再び彼をかえらせることができますか。わたしは彼の所に行くでしょうが、彼はわたしの所に帰つてこないでしょう」。

三四ダビデは妻バテシバを慰め、彼女の所にはいつて、彼女と共に寝たので、彼女は男の子を産んだ。ダビデはその名をソロモンと名づけた。主はこれを愛された。三五そして預言者ナタンをつかわし、命じてその名をエデデアと呼ばせられた。

三六さてヨアブはアンモンの人々のラバを攻めて王の町を取った。三七ヨアブは使者をダビデにつかわして言つた、「わたしはラバを攻めて水の町を取りました。三八あな

たは今、残りの民を集め、この町に向かつて陣をしき、これを取りなさい。わたしがこの町を取って、人がわたしの名をもって、これを呼ぶようにならないためです。二九そこでダビデは民をことごとく集めてラバへ行き、攻めてこれを取った。三〇そしてダビデは彼らの王の冠をその頭から取りはなした。それは金で重さは一タラントであつた。寶石がはめてあり、それをダビデの頭に置いた。ダビデはその町からぶんどり物を非常に多く持ち出した。三またダビデはそのうちの民を引き出して、彼らをのこぎりや、鉄のつるはし、鉄のおのを使う仕事につかせ、また、れんが造りの労役につかせた。彼はアンモンの人々のすべての町にこのようにした。そしてダビデと民とは皆エルサレムに帰った。

第一三章

一さてダビデの子アブサロムには名をタマルという美しい妹があつたが、その後ダビデの子アムノンはこれを恋した。二アムノンは妹タマルのために悩んでついにわづらつた。それはタマルが処女であつて、アムノンは彼女に何事もすることができなと思つたからである。三ところがアムノンにはひとりの友だちがあつた。名をヨナダブといい、ダビデの兄弟シメアの子である。ヨナダブはひじょうに賢い人であつた。四彼はアムノンに言った、「王子よ、あなたは、どうして朝ごとに、そんなにやせ衰えるのですか。わたしに話さないのですか」。アムノンは彼に言った、「わたしは兄弟アブ

サロムの妹タマルを恋しているのです」。五ヨナダブは彼に言った、「あなたは病と偽り、寢床に横たわつて、あなたの父がきてあなたを見るととき彼に言いなさい、『どうぞ、わたしの妹タマルをこさせ、わたしの所に食物を運ばせてください』。そして彼女がわたしの目の前で食物をととのえ、彼女の手からわたしが食べることでできるようにさせてください」。六そこでアムノンは横になつて病と偽つたが、王がきて彼を見た時、アムノンは王に言った、「どうぞわたしの妹タマルをこさせ、わたしの目の前で二つの菓子を作らせて、彼女の手からわたしが食べることでできるようにしてください」。

七ダビデはタマルの家に人をつかわして言させた、「あなたの兄アムノンの家へ行つて、彼のために食物をととのえなさい」。八そこでタマルはその兄アムノンの家へ行つたところ、アムノンは寝ていた。タマルは粉を取つて、これをこね、彼の目の前で、菓子を作り、その菓子を焼き、九なべを取つて彼の前にそれをあけた。しかし彼は食べることを拒んだ。そしてアムノンは、「みな、わたしを離れて出てください」と言つたので、皆、彼を離れて出た。一〇アムノンはタマルに言つた、「食物を寢室に持つてきてください。わたしはあなたの手から食べます」。そこでタマルは自分の作つた菓子をとつて、寢室にはいり兄アムノンの所へ持つていった。二タマルが彼に食べさせようとして近くに持つて行つた時、彼はタマ

ルを捕えて彼女に言った、「妹よ、来て、わたしと寝なさい」。三タマルは言った、「いいえ、兄上よ、わたしをはずかしめてはなりません。このようなことはイスラエルでは行われません。この愚かなことをしてはなりません。三わたしの恥をわたしはどこへ持って行くことができません。四あなたにはイスラエルの愚か者のひとりとなるでしょう。それゆえ、どうぞ王に話してください。王がわたしをあなたに与えないことはないでしょう」。二四しかしアムノンには彼女の言うことを聞こうともせず、タマルよりも強かったので、タマルをはずかしめてこれと共に寝た。

二五それからアムノンは、ひじょうに深くタマルを憎むようになった。彼女を憎む憎しみは、彼女を恋した恋よりも大きかった。アムノンは彼女に言った、「立って、行きなさい」。一六タマルはアムノンに言った、「いいえ、兄上よ、わたしを返すことは、あなたがさきにわたしになさった事よりも大きい悪です」。しかしアムノンは彼女の言うことを聞こうともせず、二七彼に仕えている若者を呼んで言った、「この女をわたしの所から外におくり出し、そのあとに戸を閉ざすがよい」。一八この時、タマルは長そでの着物を着ていた。昔、王の姫たちの処女である者はこのような着物を着たからである。アムノンのしもべは彼女を外に出して、そのあとに戸を閉ざした。一九タマルは灰を頭にかぶり、着ていた長そでの着物を裂

き、手を頭にのせて、叫びながら去って行った。

二〇兄アブサロムは彼女に言った、「兄アムノンがあなたと一緒にいたのか。しかし妹よ、今は黙っているなさい。彼はあなたの兄です。この事を心にとめなくてよろしい」。こうしてタマルは兄アブサロムの家に寂しく住んでいた。二一ダビデ王はこれらの事をことごとく聞いて、ひじょうに怒った。二二アブサロムはアムノンに良いことも悪いことも語ることをしなかった。それはアムノンがアブサロムの妹タマルをはずかしめたので、アブサロムが彼を憎んでいたからである。

二三満二年の後、アブサロムはエフライムの近くにあるバアル・ハゾルで羊の毛を切らせていた時、王の子たちをことごとく招いた。二四そしてアブサロムは王のもとにきて言った、「見よ、しもべは羊の毛を切らせております。どうぞ王も王の家来たちも、しもべと共にきてください」。二五王はアブサロムに言った、「いいえ、わが子よ、われわれが皆行つてはならない。あなたの重荷になるといけないから」。アブサロムはダビデに書いて願った。しかしダビデは行くことを承知せず彼に祝福を与えた。二六そこでアブサロムは言った、「それでは、どうぞわたしは兄アムノンをわれわれと共に行かせてください」。王は彼に言った、「どうして彼があなたと共に行かなければならないのか」。二七しかしアブサロムは彼に書いて願ったので、ついにアムノンと王の子たちを皆、アブサロム

と共に行かせた。二八そこでアブサロムは若者たちに命じて言った、「アムノンが酒を飲んで、心楽しくなった時を見すまし、わたしがあなたがたに、『アムノンを撃て』と言う時、彼を殺しなさい。恐れることはない。わたしが命じるのではない。雄々しくしなさい。勇ましくしなさい」。二九アブサロムの若者たちはアブサロムの命じたようにアムノンにおこなったので、王の子たちは皆立って、おのおのその驛馬に乗って逃げた。

三〇彼らがまだ着かないうちに、「アブサロムは王の子たちをことごとく殺して、ひとりも残っている者がいない」という知らせがダビデに達したので、三王は立ち、その着物を裂いて、地に伏した。そのかたわらに立っていた家来たちも皆その着物を裂いた。三しかしダビデの兄弟シメアの子ヨナダブは言った、「わが主よ、王の子たちである若者たちがみな殺されたとお考えになつてはなりません。アムノンだけが死んだのです。これは彼がアブサロムの妹タマルをはずかしめた日から、アブサロムの命によって定められていたことなのです。三三それゆえ、わが主、王よ、王の子たちが皆死んだと思つて、この事を心にとめられてはなりません。アムノンだけが死んだのです」。

三四アブサロムはのがれた。時に見張りをしていた若者が目をあげて見ると、山のかたわらのホロナイムの道から多くの民の来るのが見えた。三五ヨナダブは王に言った、

「見よ、王の子たちがきました。しもべの言つたとおりです」。三六彼が語ることを終つた時、王の子たちはきて声をあげて泣いた。王もその家来たちも皆、非常にはげしく泣いた。

三七しかしアブサロムはのがれて、ゲシユルの王アミホデの子タルマイのもとに行つた。ダビデは日々その子のために悲しんだ。三八アブサロムはのがれてゲシユルに行き、三年の間そこにいた。三九王は心に、アブサロムに会うことを、せつに望んだ。アムノンは死んでしまい、ダビデが彼のことはあきらめていたからである。

第一 四章 —ゼルヤの子ヨアブは王の心がアブサロムに向かつているのを知つた。二そこでヨアブはテコアに人をつかわして、そこからひとりの賢い女を連れてこさせ、その女に言つた、「あなたは悲しみのうちにある人をよそおつて、喪服を着、油を身に塗らず、死んだ人のために長いあいだ悲しんでいる女のように、よそおつて、三王のもとに行き、しかじかと彼に語りなさい」。こうしてヨアブはその言葉を彼女の口に授けた。

四テコアの女は王のもとに行き、地に伏して拝し、「王よ、お助けください」と言つた。五王は女に言つた、「どうしたのか」。女は言つた、「まことにわたしは寡婦でありまして、夫は死にました。六つかえめにはふたりの子どもがあり、ふたりは野で争いました、だれも彼らを引き分ける者がなかつたので、ひとりはずいに他の者を

撃つて殺しました。七すると全家族がつかえめに逆らい立って、『兄弟を撃ち殺した者を引き渡すがよい。われわれは彼が殺したその兄弟の命のために彼を殺そう』と言いい、彼らは世継をも殺そうとしました。こうして彼らは残っているわたしの炭火を消して、わたしの夫の名をも、跡継をも、地のおもてにとどめないようにしようとしています」。

八王は女に言った、「家に帰りなさい。わたしはあなたのことについて命令を下します」。九テコアの女は王に言った、「わが主、王よ、わたしとわたしの父の家にその罪を帰してください。どうぞ王と王の位には罪がありませんように」。一〇王は言った、「もしあなたに何か言う者があれば、わたしの所に連れてきなさい。そうすれば、その人は重ねてあなたに触れることはないでしょう」。二女は言った、「どうぞ王が、あなたの神、主をおぼえて、血の報復をする者に重ねて滅ぼすことをさせず、わたしの子の殺されることのないようにしてください」。王は言った、「主は生きておられる。あなたの子の髪の毛一筋も地に落ちることはないでしょう」。

三女は言った、「どうぞ、つかえめにひと言、わが主、王に言わせてください」。ダビデは言った、「言いなさい」。四女は言った、「あなたは、それならばどうして、神の民に向かってこのような事を図られたのですか。王は今この事を言われたことによって自分を罪ある者とさ

れています。それは王が追放された者を帰らせられないからです。五わたしたちはみな死ななければなりません。地にこぼれた水の再び集めることのできないのと同じです。しかし神は、追放された者が捨てられないように、てだてを設ける人の命を取ることにはなさいません。六わたしがこの事を王、わが主に言おうとして来たのは、わたしが民を恐れたからです。つかえめは、こう思ったのです、『王に申し上げよう。王は、はしための願いのようにしてくださいさるかもしれない。七王は聞いてくださる。わたしとわたしの子を共に滅ぼして神の嗣業から離れさせようとする人の手から、はしためを救い出してくださいさるのだから』。八つかえめはまた、こう思ったのです、『王、わが主の言葉はわたしを安心させるであろう』。九それは王、わが主は神の使のように善と悪を聞きわけられるからです。どうぞあなたの神、主があなたと共に

におられますように」。一〇王は女に答えて言った、「わたしが問うことに隠さず答えてください」。女は言った、「王、わが主よ、どうぞ言うってください」。一一王は言った、「このすべての事において、ヨアブの手があなたと共にありますか」。女は答えた、「あなたはたしかに生きておられます。王、わが主よ、すべて王、わが主の言われた事から人は右にも左にも曲ることはできません。わたしに命じたのは、あなたのしもべヨアブです。彼がつかえめの口に、これらの言

葉をことごとく授けたのです。二〇事のなりゆきを変えるため、あなたのしもべヨアブがこの事をしたのです。わが君には神の使の知恵のような知恵があって、地の上のすべてのことを知っておられます」。

二三そこで王はヨアブに言った、「この事を許す。行つて、若者アブサロムを連れ帰るがよい」。三ヨアブは地にひれ伏して拝し、王を祝福した。そしてヨアブは言った、「わが主、王よ、王がしもべの願いを許されたので、きょうしもべは、あなたの前に恵みを得たことを知りしました」。三三そこでヨアブは立つてゲシユルに行き、アブサロムをエルサレムに連れてきた。三四王は言った、「彼を自分の家に引きこもらせるがよい。わたしの顔を見てはならない」。こうしてアブサロムは自分の家に引きこもり、王の顔を見なかった。

三五さて全イスラエルのうちにアブサロムのように、美しさのためほめられた人はなかった。その足の裏から頭の頂まで彼には傷がなかった。三六アブサロムがその頭を刈る時、その髪の毛をはかったが、王のはかりで二百シケルあった。毎年の終りにそれを刈るのを常とした。それが重くなると、彼はそれを刈ったのである。三七アブサロムに三人のむすこと、タマルという名のひとりの娘が生れた。タマルは美しい女であった。

三八こうしてアブサロムは満二年の間エルサレムに住んだが、王の顔を見なかった。三九そこでアブサロムはヨア

ブを王のもとにつかわそうとして、ヨアブの所に人をつかわしたが、ヨアブは彼の所にこようとはしなかった。彼は再び人をつかわしたがヨアブはこようとはしなかった。三〇そこでアブサロムはその家来に言った、「ヨアブの畑はわたしの畑の隣にあって、そこに大麦がある。行つてそれに火を放ちなさい」。アブサロムの家来たちはその畑に火を放った。三一ヨアブは立つてアブサロムの家へきて彼に言った、「どうしてあなたの家来たちはわたしの畑に火を放ったのですか」。三二アブサロムはヨアブに言った、「わたしはあなたに人をつかわして、ここへ来るようにと言ったのです。あなたを王のもとにつかわし、『なんのためにわたしはゲシユルからきたのですか。なおあそこにはたならば良かったでしょう』と言わせようとしたのです。それゆえ今わたしに王の顔を見させてください。もしわたしに罪があるなら王にわたしを殺させてください」。三三そこでヨアブは王のもとへ行つて告げたので、王はアブサロムを召しよせた。彼は王のもとにきて、王の前に地にひれ伏して拝した。王はアブサロムに口づけした。

第一五章 一この後、アブサロムは自分のために戦車と馬、および自分の前に駆ける者五十人を備えた。二アブサロムは早く起きて門の道のかたわらに立つのを常とした。人が訴えがあつて王に裁判を求めに来ると、アブサロムはその人を呼んで言った、「あなたはどの町の

者ですか」。その人が「しもべはイスラエルのこれこれの部族のものです」と言うとき、三 アブサロムはその人に言った、「見よ、あなたの要求は良く、また正しい。しかしあなたのことを聞くべき人は王がまだ立てていない」。四 アブサロムはまた言った、「ああ、わたしがこの地のさばきびとであつたならばよいのに。そうすれば訴え、または申立てのあるものは、皆わたしの所にきて、わたしはこれに公平なさばきを行うことができるのだが」。五 として人が彼に敬礼しようとして近づくと、彼は手を伸べ、その人を抱きかかえて口づけした。六 アブサロムは王にさばきを求めて来るすべてのイスラエルびとにこのようにした。こうしてアブサロムはイスラエルの人々の心を自分のものとした。

七 として四年の終りに、アブサロムは王に言った、「どうぞわたしを行かせ、ヘブロンで、かつて主に立てた誓いを果させてください。八 それは、しもべがスリヤのゲシウルにいた時、誓いを立てて、『もし主がほんとうにわたしをエルサレムに連れ帰ってくださるならば、わたしは主に礼拝をささげます』と言ったからです。九 王が彼に、『安らかに行きなさい』と言ったので、彼は立ってヘブロンへ行った。一〇 としてアブサロムは密使をイスラエルのすべての部族のうちにつかわして言った、『ラツパの響きを聞くならば、『アブサロムがヘブロンで王となつた』と言いなさい』。一一 二百人の招かれた者がエルサレ

ムからアブサロムと共に行った。彼らは何心なく行き、何事をも知らなかった。三 アブサロムは犠牲をささげている間に人をつかわして、ダビデの議官ギロびとアヒトベルを、その町ギロから呼び寄せた。徒党は強く、民はしだいにアブサロムに加わった。

三 ひとりの使者がダビデのところに来て、『イスラエルの人々の心はアブサロムに従いました』と言った。四 ダビデは、自分と一緒にエルサレムにいるすべての家来に言った、『立て、われわれは逃げよう。そうしなければアブサロムの前からのがれることはできなくなるであろう。急いで行くがよい。さもないと、彼らが急ぎ追いついて、われわれに害をこうむらせ、つるぎをもって町を撃つであろう』。五 王のしもべたちは王に言った、『しもべたちは、わが主君、王の選ばれる所をすべて行います』。六 こうして王は出て行き、その全家は彼に従った。王は十人のめかけを残して家を守らせた。七 王は出て行き、民はみな彼に従った。彼らは町はずれの家にとどまった。八 彼のしもべたちは皆、彼のかたわらを進み、すべてのケレテびとと、すべてのペレテびと、および彼に従ってガテからきた六百人のガテびとは皆、王の前に進んだ。

九 時に王はガテびとイツタイに言った、『どうしてあなたもまた、われわれと共に行くのですか。あなたは帰つて王と共にいなさい。あなたは外国人で、また自分の国

から追放された者だからです。二〇あなたは、きのう来たばかりです。わたしは自分の行く所を知らずに行くのに、どうしてきよう、あなたを、われわれと共にさまよわせてよいでしょう。あなたは帰りなさい。あなたの兄弟たちも連れて帰りなさい。どうぞ主が恵みと真実をあなたに示してくださいるように」。三十一しかしイッタイは王に答えた、「主は生きておられる。わが君、王は生きておられる。わが君、王のおられる所に、死ぬも生きるも、しもべもまたそこにおります」。三十二ダビデはイッタイに言った、「では進んで行きなさい」。そこでガテびとイッタイは進み、また彼のすべての従者および彼と共にいた子どもたちも皆、進んだ。三十三国中みな大声で泣いた。民はみな進んだ。王もまたキデロンの谷を渡って進み、民は皆進んで荒野の方に向かった。

二四そしてアビヤタルも上ってきた。見よ、ザドクおよび彼と共にいるすべてのレビびともまた、神の契約の箱をかいてきた。彼らは神の箱をおろして、民がことごとく町を出てしまふのを待った。二五そこで王はザドクに言った、「神の箱を町にかきもどすがよい。もしわたしが主の前に恵みを得るならば、主はわたしを連れ帰って、わたしにその箱とそのすまいとを見させてくださるであらう。三六しかしもし主が、『わたしはおまえを喜ばない』とそう言われるのであれば、どうぞ主が良しと思われ、ことをわたしにしてくださいるように。わたしはここにお

ります」。二七王はまた祭司ザドクに言った、「見よ、あなたもアビヤタルも、ふたりの子たち、すなわちあなたの子アヒマアズとアビヤタルの子ヨナタンを連れて、安らかに町に帰りなさい。二八わたしはあなたがたから言葉があつて知らせをうけるまで、荒野の渡し場にとどまります」。二九そこでザドクとアビヤタルは神の箱をエルサレムにかきもどり、そこにとどまった。

三〇ダビデはオリブ山の坂道を登ったが、登る時に泣き、その頭をおおい、はだして行つた。彼と共にいる民もみな頭をおおって登り、泣きながら登った。三時に、「アヒトベルがアブサロムと共謀した者のうちにいる」とダビデに告げる人があつたのでダビデは言った、「主よ、どうぞアヒトベルの計略を愚かなものにしてください」。

三二ダビデが山の頂にある神を礼拝する場所にきた時、見よ、アルキびとホシヤイはその上着を裂き、頭に土をかぶり、来てダビデを迎えた。三三ダビデは彼に言った、「もしあなたがわたしと共に進むならば、わたしの重荷となるであらう。三四しかしもしあなたが町に帰ってアブサロムに向かい、『王よ、わたしはあなたのしもべとなります。わたしはこれまで、あなたの父のしもべであつたように、わたしは今あなたのしもべとなります』と言うならば、あなたはわたしのためにアヒトベルの計略を破ることができるであらう。三五祭司たち、ザドクとアビヤタルとは、あなたと共にあそこにいるではないか。それ

ゆえ、あなたは王の家から聞くことをことごとく祭司たち、ザドクとアビヤタルとに告げなさい。三六 あそこには彼らと共にそのふたりの子たち、すなわちザドクの子アヒアズとアビヤタルの子ヨナタンとがいる。あなたがたは聞いたことをことごとく彼らの手によってわたしに通報しなさい。三七 そこでダビデの友ホシヤイは町にはいった。その時アブサロムはすでにエルサレムにはいなかった。

第一章 「ダビデが山の頂を過ぎて、すこし行った時、メピボセテのしもべザバは、くらを置いた二頭のろばを引き、その上にパン二百個、干ぶどう百ふさ、夏のくだもの一百、ぶどう酒一袋を載せてきてダビデを迎えた。二王はザバに言った、「あなたはこうしてこれらのものを持ってきたのですか」。ザバは答えた、「ろばは王の家族が乗るため、パンと夏のくだものは若者たちが食べるため、ぶどう酒は荒野で弱った者が飲むためです」。三王は言った、「あなたの主人の子はどこにおるのですか」。ザバは王に言った、「エルサレムにとどまっています。彼は、『イスラエルの家はきょう、わたしの父の国をわたしに返すであろう』と思ったのです」。四王はザバに言った、「見よ、メピボセテのものはことごとくあなたのものです」。ザバは言った、「わたしは敬意を表します。わが主、王よ、あなたの前にいつまでも恵みを得させてください」。

五ダビデ王がバホルムにきた時、サウルの家の一族の者がひとりそこから出てきた。その名をシメイといい、ゲラの子である。彼は出てきながら絶えずのろった。六そして彼はダビデとダビデ王のもろもろの家来に向かつて石を投げた。その時、民と勇士たちはみな王の左右にいた。七シメイはのろう時にこう言った、「血を流す人よ、よこしまな人よ、立ち去れ、立ち去れ。八あなたが代って王となったサウルの家の血をすべて主があなたに報いられたのだ。主は王国をあなたの子アブサロムの手に渡された。見よ、あなたは血を流す人だから、災に会うのだ」。

九時にゼルヤの子アビシヤイは王に言った、「この死んだ犬がどうしてわが主、王をのろってよがるうか。わたしに、行って彼の首を取らせてください」。一〇しかし王は言った、「ゼルヤの子たちよ、あなたがたと、なんのかわりがあるのか。彼がのろうのは、主が彼に、『ダビデをのろえ』と言われたからであるならば、だれが、『あなたはこうしてこういうことをするのか』と言ってよいであらうか」。二ダビデはまたアビシヤイと自分のすべての家来とに言った、「わたしの身から出たわが子がわたしの命を求めている。今、このベニヤミンびととしてはおさらだ。彼を許してのろわせておきなさい。主が彼に命じられたのだ。三主はわたしの悩みを顧みてくださるかもしれない。また主はきょう彼ののろいにかえて、わ

たしに善を報いてくださるかも知れない」。三こうしてダビデとその従者たちとは道を行つたが、シメイはダビデに並んで向かいの山の中腹を行き、行きながらのろい、また彼に向かつて石や、ちりを投げつけた。四王および共にいる民はみな疲れてヨルダンに着き、彼はその所で息をついだ。

五さてアブサロムとすべての民、イスラエルの人々はエルサレムにきた。アヒトベルもアブサロムと共にいた。六ダビデの友であるアルキびとホシヤイがアブサロムのもとにきた時、ホシヤイはアブサロムに「王万歳、王万歳」と言つた。七アブサロムはホシヤイに言つた、「これはあなたがその友に示す真実なのか。あなたはどうしてあなたの友と一緒に行かなかつたのか。八ホシヤイはアブサロムに言つた、「いいえ、主とこの民とイスラエルのすべての人々が選んだ者にわたしは属し、かつその人と一緒におります。九かつまたわたしはだれに仕えるべきですか。その子の前に仕えるべきではありませんか。あなたの父の前に仕えたように、わたしはあなたの前に仕えます」。

一〇そこでアブサロムはアヒトベルに言つた、「あなたがたは、われわれがどうしたらよいのか、計りごとを述べなさい」。二アヒトベルはアブサロムに言つた、「あなたの父が家を守るために残された、めかけたちの所にはいりなさい。そうすればイスラエルは皆あなたが父上に憎

まれることを聞くでしょう。そしてあなたと一緒にいる者の手は強くなるでしょう。三こうして彼らがアブサロムのために屋上に天幕を張つたので、アブサロムは全イスラエルの目の前で父のめかけたちの所にはいった。四そのころアヒトベルが授ける計りごとは人が神のみ告げを伺うようであつた。アヒトベルの計りごとは皆ダビデにもアブサロムにも共にそのように思われた。

第一七章 一時にアヒトベルはアブサロムに言つた、「わたしに一万二千の人を選び出させてください。わたしは立つて、今夜ダビデのあとを追ひ、二彼が疲れて手が弱くなつてゐるところを襲つて、彼をあわてさせましょう。そして彼と共にいる民がみな逃げるとき、わたしは王ひとりを取り、三すべての民を花嫁がその夫のもとに帰るようになつたに帰らせましょう。あなたが求めておられるのはただひとりの命だけです。民はみな穏やかになるでしょう。四この言葉はアブサロムとイスラエルのすべての長老の心になつた。

五そこでアブサロムは言つた、「アルキびとホシヤイを呼びよせなさい。われわれは彼の言うことを聞きましよう。六ホシヤイがアブサロムのもとにきた時、アブサロムは彼に言つた、「アヒトベルはこのように言つた。われわれは彼の言葉のように行ふべきか。いけないのであれば、言いなさい」。七ホシヤイはアブサロムに言つた、「このたびアヒトベルが授けた計りごとは良くありません

ん」。ハホシヤイはまた言った、「ごぞんじのように、あなたの父とその従者たちとは勇士です。その上彼らは、野で子を奪われた熊のように、ひどく怒っています。また、あなた達の父はいくさびとですから、民と共に宿らないでしよう。彼は今でも穴の中か、どこかほかの所にかくれています。もし民のうちの幾人かが手始めに倒れるならば、それを聞く者はだれでも、『アブサロムに従う民のうちに戦死者があつた』と言うでしょう。『さうすれば、ししの心のような心のある勇ましい人であっても、恐れて消え去ってしまうでしょう。それはイスラエルのすべての人が、あなたの父の勇士であること、また彼と共にいる者が、勇ましい人々であることを知っているからです。二ところでわたしの計りごとは、イスラエルをダンからベエルシバまで、海への砂のように多くあなたのもとに集めて、あなたみずから戦いに臨むことです。三こうしてわれわれは彼の見つかる場所^{ばしょ}で彼を襲い、つゆが地におりるように彼のの上に下る。そして彼および彼と共にいるすべての人をひとりも残さないでしょう。三もし彼がいずれかの町に退くならば、全イスラエルはその町になわをかけ、われわれはそれを谷に引き倒して、そこに一つの小石も見られないようにするでしょう。二四アブサロムとイスラエルの人々はみな、『アルキびとホシヤイの計りごとは、アヒトベルの計りごとよりもよい』と言った。それは主がアブサロムに災を下そうとして、ア

ヒトベルの良^よい計^{はか}りごとを破^{やぶ}ることを定^{さだ}められたからである。

一五そこでホシャイは祭司たち、ザドクとアビヤタルとに言った、「アヒトベルはアブサロムとイスラエルの長老たちのためにこういう計りごとをした。またわたしはこういう計りごとをした。一六それゆえ、あなたがたはすみやかに人をつかわしてダビデに告げ、『今夜、荒野の渡し場に宿らないで、必ず渡って行きなさい。さもないと王および共にいる民はみな、滅ぼされるでしょう』と言いなさい」。一七時に、ヨナタンとアヒマアズはエンロゲルで待っていた。ひとりのつかえめが行って彼らに告げ、彼らは行ってダビデ王に告げるのが常であった。それは彼らが町にはいるのを見られないようにするためである。一八ところがひとりの若者が彼らを見てアブサロムに告げたので、彼らふたりは急いで去り、バホルムの、あるひとりの人の家に来た。その人の庭に井戸があつて、彼らはその中に下つたので、一九女はおおいを取ってきて井戸の口の上にひろげ、麦をその上にまき散らした。それゆえその事は何も知れなかった。二〇アブサロムのしもべたちはその女の家にきて言った、「アヒマアズとヨナタンはどこにいますか」。女は彼らに言った、「あの人々はお小川を渡って行きました」。彼らは尋ねたが見当らなかつたのでエルサレムに帰つた。

三 彼^{かれ}ら^が去^さつた^{のち}後^{ひとびと}、人^{ひと}々^{びと}は井^い戸^どから上^{のぼ}り、行^いつてダビ

デ王に告げた。すなわち彼らはダビデに言った、「立って、すみやかに川を渡りなさい。アヒトベルがあなたをたに對してこういう計りごとをしたからです。三そこでダビデは立って、共にいるすべての民と一緒にヨルダンを渡った。夜明けには、ヨルダンを渡らない者はひとりもなかった。

三三アヒトベルは、自分の計りごとが行われないのを見て、ろばにくらを置き、立って自分の町に行き、その家に帰った。そして家の人に遺言してみずからくびれて死に、その父の墓に葬られた。

三四ダビデはマハナイムにきた。またアブサロムは自分と共にいるイスラエルのすべての人々と一緒にヨルダンを渡った。三五アブサロムはアマサをヨアブの代りに軍の長とした。アマサはかのナハシの娘でヨアブの母ゼルヤの妹であるアビガルをめとったイシマエルびと、名はイトラという人の子である。三六そしてイスラエルとアブサロムはギレアドの地に陣取った。

三七ダビデがマハナイムにきた時、アンモンの人々のうちのラバのナハシの子シヨビと、ロデバルのアンミエルの子マキル、およびロゲリムのギレアドびとバルジライは、三八寢床と鉢、土器、小麦、大麦、粉、いり麦、豆、レンズ豆、三九蜜、凝乳、羊、乾酪をダビデおよび共にいる民が食べるために持ってきた。それは彼らが、「民は荒野で飢え疲れかわいている」と思ったからである。

第一八章

一さてダビデは自分と共にいる民を調べて、その上に千人の長、百人の長を立てた。二そしてダビデは民をつかわし、三分の一をヨアブの手に、三分の一をゼルヤの子ヨアブの兄弟アビシャイの手に、三分の一をガデびとイツタイの手にあずけた。こうして王は民に言った、「わたしもまた必ずあなたがたと一緒に出ます。三しかし民は言った、「あなたは出てはなりません。それはわれわれがどんなに逃げて、彼らはわれわれに心をとめず、われわれの半ばが死んでも、われわれに心をとめないからです。しかしあなたはわれわれの一万に等しいのです。それゆえあなたは町の中からわれわれを助けてくださる方がよろしい。四王は彼らに言った、「あなたがたの最も良いと思うことをわたしはしましよう。こうして王は門のかたわらに立ち、民は皆あるいは百人、あるいは千人となって出て行った。五王はヨアブ、アビシャイおよびイツタイに命じて、「わたしのため、若者アブサロムをおだやかに扱うように」と言った。王がアブサロムの事についてすべての長たちに命じている時、民は皆聞いていた。

六こうして民はイスラエルに向かって野に出て行き、エフライムの森で戦ったが、セイスラエルの民はその所でダビデの家来たちの前に敗れた。その日その所に戦死者が多く、二万に及んだ。七そして戦いはあまねくその地のおもてに広がった。この日、森の滅ぼした者は、つ

るぎの滅ぼした者よりも多かった。

九 さてアブサロムはダビデの家来たちに行き会った。その時アブサロムは騾馬に乗っていたが、騾馬は大きなかしの木の、茂った枝の下を通ったので、アブサロムの頭がそのかしの木にかかつて、彼は天地の間につりさがった。騾馬は彼を捨てて過ぎて行った。一ひとりの人がそれを見てヨアブに告げて言った、「わたしはアブサロムが、かしの木にかかつているのを見ました」。二ヨアブはそれを告げた人に言った、「あなたはそれを見たというのか。それなら、どうしてあなたは彼をその所で、地に撃ち落さなかったのか。わたしはあなたに銀十シケルと帯一筋を与えたであらうに」。三その人はヨアブに言った、「たといわたしの手に銀十シケルを受けても、手を出して王の子に敵することはしません。王はわれわれが聞いているところで、あなたとアビシヤイとイツタイに、『わたしのため若者アブサロムを保護せよ』と命じられたからです。四もしわたしがそむいて彼の命をそこなったのであれば、何事も王に隠れることはありませんから、あなたはみずから立ってわたしを責められたでしょう。五そこで、ヨアブは「こうしてあなたと共にとどまっておられない」と言って、手に三筋の投げやりを取り、あのかしの木にかかつて、なお生きているアブサロムの心臓にこれを突き通した。六ヨアブの武器を執る十人の若者たちは取り巻いて、アブサロムを撃ち殺

した。

二六 こうしてヨアブがラッパを吹いたので、民はイスラエルのあとを追うことをやめて帰った。ヨアブが民を引きとめたからである。二七人々はアブサロムを取って、森の中の大きな穴に投げいれ、その上にひじょうに大きな石塚を積み上げた。そしてイスラエルはみなおのおのその天幕に逃げ帰った。二八さてアブサロムは生きていて、間に、王の谷に自分のために一つの柱を建てた。それは彼が、「わたしは自分の名を伝える子がない」と思ったからである。彼はその柱に自分の名をつけた。その柱は今日までアブサロムの碑となえられている。

二九 さてザドクの子アヒマズは言った、「わたしは走って行って、主が王を敵の手から救い出されたおとずれを王に伝えましょう」。三〇ヨアブは彼に言った、「きょうは、おとずれを伝えてはならない。おとずれを伝えるのは、ほかの日にしなさい。きょうは王の子が死んだので、おとずれを伝えてはならない」。三一ヨアブはクシビトに言った、「行って、あなたの見た事を王に告げなさい」。クシビトはヨアブに礼をして走って行った。三二ザドクの子アヒマズは重ねてヨアブに言った、「何事があるうとも、わたしにもクシビトのあとから走って行かせてください」。ヨアブは言った、「子よ、おとずれの報いを得られないのに、どうしてあなたは走って行こうとするのか」。三三彼は言った、「何事があるうとも、わたしは走っ

て行きます」。ヨアブは彼に言った、「走って行きなさい」。そこでアヒマアズは低地の道を走って行き、クシびとを追い越した。

二四時にダビデは二つの門の間にすわっていた。そして見張りの者が城壁の門の屋根にのぼり、目をあげて見てみると、ただひとり走ってくる者があった。二五見張りの者が呼ばわって王に告げたので、王は言った、「もしひとりならば、その口におとずれがあるであろう」。その人は急いできて近づいた。二六見張りの者は、ほかにまたひとり走ってくるのを見たので、門の方に呼ばわって言った、「見よ、ほかにただひとり走ってくる者があります」。王は言った、「彼もまたおとずれを持ってくるのだ」。二七見張りの者は言った、「まっ先に走ってくる人はザドクの子アヒマアズの上です」。王は言った、「彼は良い人だ。良いおとずれを持ってくるであろう」。

二八時にアヒマアズは呼ばわって王に言った、「平安でいらせられますように」。そして王の前に地にひれ伏して言った、「あなたの神、主はほむべきかな。主は王、わが君に敵して手をあげた人々を引き渡されました」。二九王は言った、「若者アブサロムは平安ですか」。アヒマアズは答えた、「ヨアブがしもべをつかわす時、わたしは大きな騒ぎを見ましたが、何事であつたか知りません」。三〇王は言った、「わきへ行って、そこに立っていなさい」。彼はわきへ行って立った。

三その時クシびとがきた。そしてそのクシびとは言った、「わが君、王が良いおとずれをお受けくださるよう。主はきょう、すべてあなたに敵して立った者どもの手から、あなたを救い出されたのです」。三三王はクシびとに言った、「若者アブサロムは平安ですか」。クシびとは答えた、「王、わが君の敵、およびすべてあなたに敵して立ち、害をしようとする者は、あの若者のようになりましように」。三三王はひじょうに悲しみ、門の上のへやに上って泣いた。彼は行きながらこのように言った、「わが子アブサロムよ。わが子、わが子アブサロムよ。ああ、わたしが代って死ねばよかったのに。アブサロム、わが子よ、わが子よ」。

第一九章 一時にヨアブに告げる者があつて、「見よ、王はアブサロムのために泣き悲しんでいる」と言つた。二こうしてその日の勝利はすべての民の悲しみと化した。三それはその日、民が、「王はその子のために悲しなった。それはその日、民が、王はその子のために悲しんでいる」と人の言うのを聞いたからである。四そして民はその日、戦いに逃げて恥じている民がひそかに、はいるように、ひそかに町にはいった。五王は顔をおおつた。そして王は大声に叫んで、「わが子アブサロムよ。アブサロム、わが子よ、わが子よ」と言つた。五時にヨアブは家にはいり、王のもとにきて言つた、「あなたは、きょう、あなたの命と、あなたのむすこ娘たちの命、およびあなたの妻たちの命と、めかけたちの命を救つたす

すべての家来の顔をはずかしめられました。それはあなたが自分を憎む者を愛し、自分を愛する者を憎まれるからです。あなたは、きょう、軍の長たちをも、しもべたちをも顧みないことを示されました。きょう、わたしは知りました。もし、アブサロムが生きていて、われわれが皆きょう死んでいたら、あなたの目になつたでしよう。今立って出て行って、しもべたちにねんごろに語ってください。わたしは主をさして誓います。もしあなたが出られないならば、今夜あなたと共にとどまる者はひとりもないでしよう。これはあなたが若い時から今までにこうむられたすべての災よりも、あなたにとって悪いでしよう。そこで王は立って門のうちの座についた。人々はすべての民に、「見よ、王は門に座している」と告げたので、民はみな王の前にきた。

さてイスラエルはおのおのその天幕に逃げ帰った。そしてイスラエルのもろもろの部族の中で民はみな争って言った、「王はわれわれを敵の手から救い出し、またわれわれをベリシテびとの手から助け出された。しかし今はアブサロムのために国のそとに逃げておられる。またわれわれが油を注いで、われわれの上に立てたアブサロムは戦いで死んだ。それであるのに、どうしてあなたがたは王を導きかえることについて、何をも言わないのか」。

ニダビデ王は祭司たちザドクとアビヤタルとに人をつ

かわして言った、「ユダの長老たちに言いなさい、『全イスラエルの言葉が王に達したのに、どうしてあなたがたは王をその家に導きかえる最後の者となるのですか。三あなたがたはわたしの兄弟、わたしの骨肉です。それにどうして王を導きかえる最後の者となるのですか。』三またアマサに言いなさい、『あなたはわたしの骨肉ではありませんか。これから後あなたをヨアブに代えて、わたしの軍の長とします。もしそうしないときは、神が幾重にもわたしを罰してください』。二こうしてダビデはユダのすべての人の心を、ひとりのように自分に傾けさせたので、彼らは王に、「どうぞあなたも、すべての家来たちも帰ってきてください」と言いおくれた。一五そこで王は帰ってきてヨルダンまで来ると、ユダの人は王を迎えるためギルガルにきて、王にヨルダンを渡らせた。

一六バホルムのベニヤミンびと、ゲラの子シメイは、急いでユダの人々と共に下ってきて、ダビデ王を迎えた。一七一千人のベニヤミンびとが彼と共にいた。またサウルの家のしもべデバもその十五人のむすこと、二十人のしもべを従えて、王の前にヨルダンに駆け下った。一八そして王の家族を渡し、王の心にかなうことをしようと渡し、王の家族を渡した。ゲラの子シメイはヨルダンを渡ろうとする時、王の前にひれ伏し、「王に言った、『どうぞわが君が、罪をわたしに帰しられないように。またわが君、王のエ

エルサレムを出られた日に、しもべがおこなった悪い事を思い出されないように。どうぞ王がそれを心に留められないように。もしもべは自分が罪を犯したことを知っています。それゆえ、見よ、わたしはきよう、ヨセフの全家のまっ先に下ってきて、わが主、王を迎えるのです。三ゼルヤの子アビシヤイは答えて言った、「シメイは主が油を注がれた者をのろったので、そのために殺されるべきではありませんか」。三ダビデは言った、「あなたがたゼルヤの子たちよ、あなたがたとにののかかわりがあったて、あなたがたはきようわたしに敵対するのか。きよう、イスラエルのうちで人を殺して良からうか。わたしが、きようイスラエルの王となったことを、どうして自分で知らないことがあるうか」。三こうして王はシメイに、「あなたを殺さない」と言って、王は彼に誓った。

二四 サウルの子メピボセテは下ってきて王を迎えた。彼は王が去った日から安らかに帰る日まで、その足を飾らず、そのひげを整えず、またその着物を洗わなかった。三五 彼がエルサレムからきて王を迎えた時、王は彼に言った、「メピボセテよ、あなたはどうしてわたしと共に行かなかったのか」。二六 彼は答えた、「わが主、王よ、わたしの家来がわたしを欺いたのです。しもべは彼に、『わたしのために、ろばにくらを置き。わたしはそれに乗って王と共に行く』と言ったのです。しもべは足なえだからです。二七ところが彼はしもべのことをわが主、王の前に、

あしざまに言ったのです。しかし、わが主、王は神の使のようであらせられます。それで、あなたの良いと思われることをしてください。二八 わたしの父の全家はわが主、王の前にはみな死んだ人にすぎないのに、あなたはしもべを、あなたの食卓で食事をする人々のうちに置かれました。わたしになんの権利があつて、重ねて王に訴えることができましょう。二九 王は彼に言った、「あなたは、どうしてなおも自分のことを言うのですか。わたしは決めました。あなたがたとデバとはその土地を分けなさい。三〇 メピボセテは王に言った、「わが主、王が安らかに家に帰られたのですから、彼にそれをみな取らせてください」。

三一 さてギレアデびとバルジライはロゲリムから下ってきて、ヨルダンで王を見送るため、王と共にヨルダンに進んだ。三二 バルジライは、ひじょうに年老いた人で八十歳であつた。彼はまた、ひじょうに裕福な人であつたので、王がマハナイムにとどまっている間、王を養った。三三 王はバルジライに言った、「わたしと一緒に渡って行きなさい。わたしはエルサレムであなをわたしと共におらせて養いましょう」。三四 バルジライは王に言った、「わたしは、なお何年いきながらえるので、王と共にエルサレムに上るのですか。三五 わたしは今日八十歳です。わたしに、良いこと悪いことがわきまえられるでしょうか。しもべは食べるもの、飲むものを味わうことができま

しょうか。わたしは歌う男や歌う女の声をまだ聞くことができましようか。それであるのに、しもべはどうしてなおわが主、王の重荷となつてよろしいでしようか。三六しもべは王と共にヨルダンを渡つて、ただ少し行きましよう。どうして王はこのような報いをわたしに報いらなければならないのでしようか。三七どうぞしもべを帰らせてください。わたしは自分の町で、父母の墓の近くで死にます。ただし、あなたのしもべキムハムがここにおります。わが主、王と共に彼を渡つて行かせてください。またあなたが良いと思われる事を彼にしてください。三八王は答えた、「キムハムはわたしと共に渡つて行かせます。わたしは、あなたが良いと思われる事を彼にしましよう。またあなたが望まれることはみな、あなたのためにいたします。三九こうして民はみなヨルダンを渡つた。王は渡つた時、バルジライに口づけして、祝福したので、彼は自分の家に歸つていった。四〇王はギルガルに進んだ。キムハムも彼と共に進んだ。ユダの民はみな王を送り、イスラエルの民の半ばもまたそうした。

四一さてイスラエルの人々はみな王の所にきて、王に言った、「われわれの兄弟であるユダの人々は、何ゆえにあなたを盗み去つて、王とその家族、およびダビデに伴っているすべての従者にヨルダンを渡らせたのですか」。四二ユダの人々はみなイスラエルの人々に答えた、「王はわれわれの近親だからです。あなたがたはどうし

てこの事で怒られるのですか。われわれが少しでも王の物を食べたことがありますか。王が何か賜物をわれわれに与えたことがありますか」。四三イスラエルの人々はユダの人々に答えた、「われわれは王のうちに十の分を持つています。またダビデのうちにもわれわれはあなたがたよりも多くを持っています。それであるのに、どうしてあなたがたはわれわれを軽んじたのですか。われらの王を導き帰ろうと最初に言つたのはわれわれではないのですか」。しかしユダの人々の言葉はイスラエルの人々の言葉よりも激しかった。

第二〇章 一さて、その所にひとりのよこしまな人があつて、名をシバといった。ピクリの子で、ベニヤミンびとであつた。彼はラツバを吹いて言つた、「われわれはダビデのうちに分がない。またエッサイの子のうちに嗣業を持たない。イスラエルよ、おのおのその天幕に歸りなさい」。二そこでイスラエルの人々は皆ダビデに従う事をやめて、ピクリの子シバに従つた。しかしユダの人々はその王につき従つて、ヨルダンからエルサレムへ行つた。

三ダビデはエルサレムの自分の家にきた。そして王は家を守るために残しておいた十人のめかけたちを取つて、一つの家に入れて守り、また養つたが、彼女たちの所には、はいらなかつた。彼女たちは死ぬ日まで閉じこめられ一生、寡婦としてすごした。

四王はアマサに言った、「わたしのため三日のうちにユダの人々を呼び集めて、ここにきなさい」。五アマサはユダを呼び集めるために行ったが、彼は定められた時よりもおくれた。六ダビデはアビシヤイに言った、「ビクリの子シバは今われわれにアブサロムよりも多くの害をするであろう。あなたの主君の家来たちを率いて、彼のあとを追いなさい。さもないと彼は堅固な町々を獲て、われわれを悩ますであろう」。七こうしてヨアブとケレテびととベレテびと、およびすべての勇士はアビシヤイに従って出た。すなわち彼らはエルサレムを出て、ビクリの子シバのあとを追った。八彼らがギベオンにある大石のところにいた時、アマサがきて彼らに会った。時にヨアブは軍服を着て、帯をしめ、その上にさやに納めたつるぎを腰に結んで帯びていたが、彼が進み出た時つるぎは抜け落ちた。九ヨアブはアマサに、「兄弟よ、あなたは安らかですか」と言つて、ヨアブは右の手をもってアマサのひげを捕えて彼に口づけしようとしたが、一〇アマサはヨアブの手につるぎがあることに気づかなかつたので、ヨアブはそれをもってアマサの腹部を刺して、そのはらわたを地に流し出し、重ねて撃つこともなく彼を殺した。こうしてヨアブとその兄弟アビシヤイはビクリの子シバのあとを追った。二時にヨアブの若者のひとりアマサのかたわらに立って言つた、「ヨアブに味方する者、ダビデにつく者はヨアブのあとに従いなさい」。三アマサ

は血に染んで大路のところに落ちていたので、そのそばに来る者はみな彼を見て立ちどまった。この人は民がみな立ちどまるのを見て、アマサを大路から畑に移し、衣服をその上にかけた。三アマサが大路から移されたので、民は皆ヨアブに従って進み、ビクリの子シバのあとを追つた。

一四シバはイスラエルのすべての部族のうちを通つてベテマアカのアベルにきた。ビクリびとは皆、集まつてきて彼に従つた。一五そこでヨアブと共にいたすべての人々がきて、彼をベテマアカのアベルに囲み、町に向かつて土塁を築いた。それはとりでに向かつて立てられた。こうして彼らは城壁をくずそうとしてこれを撃つた。一六その時、ひとりの賢い女が町から呼ばわつた、「あなたがたは聞きなさい。あなたがたは聞きなさい。ヨアブに、『ここにきてください。わたしはあなたに言うことがあります』と言つてください」。一七彼がその女に近寄ると、女は「あなたがヨアブですか」と言つた。彼は「そうです」と答えた。すると女は彼に「はしための言葉をお聞きください」と言つたので、「聞きましよう」と彼は言つた。一八そこで女は言つた、「昔、人々はいつても、『アベルで尋ねなさい』と言つて、事を定めました。九わたしはイスラエルのうちの平和な、忠誠な者です。そうであるのに、あなたはイスラエルのうちで母ともいうべき町を滅ぼそうとしておられます。どうして主の嗣業を、のみ尽そう

とされるのですか」。二〇 ヨアブは答えた、「いいえ、決してそうではなく、わたしが、のみ尽したり、滅ぼしたりすることはありません。三 事實はそうではなく、エフライムの山地の人ピクリの子、名をシバという者が手をあげて王ダビデにそむいたのです。あなたがたが彼ひとりを渡すならば、わたしはこの町を去ります」。女はヨアブに言った、「彼の首は城壁の上からあなたの所へ投げられるでしょう」。三〇 こうしてこの女が知恵をもって、すべての民の所に行ったので、彼らはピクリの子シバの首をはねてヨアブの所へ投げ出した。そこでヨアブはラッパを吹きならしたので、人々は散って町を去り、おの家の家に帰った。ヨアブはエルサレムにいる王のもとに帰った。

三一 ヨアブはイスラエルの全軍の長であった。エホヤダの子ベナヤはケレテびと、およびベレテびとの長、二四 アドラムは徴募人の長、アヒルデの子ヨシヤパテは史官、二五 シワは書記官、ザドクとアビヤタルとは祭司。二六 またヤイルびとイラはダビデの祭司であった。

第二一章 「ダビデの世に、年また年と三年、きんがあつたので、ダビデが主に尋ねたところ、主は言われた、「サウルとその家とに、血を流した罪がある。それはかつて彼がギベオンびとを殺したためである」。二七 ここで王はギベオンびとを召しよせた。ギベオンびとはイスラエルの子孫ではなく、アモリびとの残りであつて、

イスラエルの人々は彼らと誓いを立てて、その命を助けた。ところがサウルはイスラエルとエダの人々のために熱心であつたので、彼らを殺そうとしたのである。三〇 それでダビデはギベオンびとに言った、「わたしはあなたがたのために、何をすればよいのですか。どんな償いをすれば、あなたがたは主の嗣業を祝福するのですか」。四 ギベオンびとは彼に言った、「これはわれわれと、サウルまたはその家との間の金銀の問題ではありません。またイスラエルのうちのひとりでも、われわれが殺そうというのでもありません」。ダビデは言った、「わたしがあなたがたのために何をすればよいと言うのですか」。五 かれらは王に言った、「われわれを滅ぼした人、われわれを滅ぼしてイスラエルの領域のどこにもおらせないようにと、たくらんだ人、六 その人の子孫七人を引き渡してください。われわれは主の山にあるギベオンで、彼らを主の前に木にかけましょう」。王は言った、「引き渡しなすう」。

七 しかし王はサウルの子ヨナタンの子であるメビボセテを惜しんだ。彼らの間、すなわちダビデとサウルの子ヨナタンとの間に、主をさして立てた誓いがあつたからである。八 王はアヤの娘リヅバがサウルに産んだふたりの子アルモニとメビボセテ、およびサウルの子メラブがメホラびとバルジライの子アデリエルに産んだ五人の子を取って、九 彼らをギベオンびとの手に引き渡したので、

ギベオンびとは彼らを山で主の前に木にかけた。彼ら七人は共に倒れた。彼らは刈入れの初めの日、すなわち大麥刈りの初めに殺された。

二〇アヤの娘リヅパは荒布をとって、それを自分のために岩の上に敷き、刈入れの初めから、その人々の死体の上に天から雨が降るまで、昼は空の鳥が死体の上にこないようにし、夜は野の獣を近寄らせなかった。ニアヤの娘でサウルのめかけであつたりリヅパのしたことがダビデに聞えたので、三ダビデは行ってサウルの骨とその子ヨナタンの骨を、ヤベシギレアデの人々の所から取つてきた。これはベリシテびとがサウルをギルボアで殺した日に、木にかけたベテシャンの広場から、彼らが盗んでいれたものである。三ダビデはそこからサウルの骨と、その子ヨナタンの骨を携えて上つた。また人々はそのかけられた者どもの骨を集めた。四こうして彼らはサウルとその子ヨナタンの骨を、ベニヤミンの地のゼラにあるその父キシの墓に葬り、すべて王の命じたようにした。この後、神はその地のために、祈を聞かれた。

二五ベリシテびとはまたイスラエルと戦争をした。ダビデはその家来たちと共に下つてベリシテびとと戦つたが、ダビデは疲れてゐた。二六時にイシビベノブはダビデを殺そうと思つた。イシビベノブは巨人の子孫で、そのやりは青銅で重き三百シケルあり、彼は新しいつるぎを帯びてゐた。七しかしゼルヤの子アビシヤイはダビデを

助けて、そのベリシテびとを撃ち殺した。そこでダビデの従者たちは彼に誓つて言つた、「あなたはわれわれと共に、重ねて戦争に出てはなりません。さもないと、あなたはイスラエルのともし火を消すでしょう」。

二八この後、再びゴブでベリシテびととの戦いがあつた。時にホシヤびとシベカイは巨人の子孫のひとりサフを殺した。二九ここにまたゴブで、ベリシテびととの戦いがあつたが、そこではベツレヘムびとヤレオレギムの子エルハナンは、ガテびとゴリアテを殺した。そのやりの柄は機の巻棒のようであつた。三〇またガテで再び戦いがあつたが、そこにひとりの背の高い人があり、その手の指と足の指は六本ずつで、その数は合わせて二十四本であつた。彼もまた巨人から生れた者であつた。三彼はイスラエルをのしつたので、ダビデの兄弟シメアの子ヨナタンが彼を殺した。三これらの四人はガテで巨人から生れた者であつたが、ダビデの手とその家来たちの手に倒れた。

第二二章 一ダビデは主がもろもろの敵の手とサウルの手から、自分を救ひ出された日に、この歌の言葉を主に向かつて述べ、二彼は言つた、

「主はわが岩、わが城、わたしを救う者、
三わが神、わが岩。わたしは彼に寄り頼む。

わが盾、わが救の角、
わが高きやぐら、わが避け所、

わが救主。あなたはわたしを暴虐から救われる。

四 わたしは、ほめまつるべき主に呼ばわって、

五 わたしの敵から救われる。

六 死の波はわたしをとりまき、

七 滅びの大水はわたしを襲った。

八 陰府の綱はわたしをとりかこみ、

九 死のわなはわたしに、たち向かった。

一〇 苦難のうちにわたしは主を呼び、

一一 またわが神に呼ばわった。

一二 主がその宮からわたしの声を聞かれて、

一三 わたしの叫びはその耳にとどいた。

一四 その時地は震いうごき、

一五 天の基はゆるぎふるえた。

一六 彼が怒られたからである。

一七 煙はその鼻からたち上り、

一八 火はその口から出て焼きつくし、

一九 白熱の炭は彼から燃え出た。

二〇 彼は天を低くして下られ、

二一 暗やみが彼の足の下にあった。

二二 彼はケルブに乗って飛び、

二五 風の翼に乗ってあらわれた。

二六 彼はその周囲に幕屋として、

二七 やみと濃き雲と水の集まりとを置かれた。

二八 そのみ前の輝きから

炭火が燃え出た。

一四 主は天から雷をとどろかせ、

一五 いと高き者は声を出された。

一六 彼はまた矢を放って彼らを散らし、

一七 いなずまを放って彼らを撃ち破られた。

一八 主のとがめと、その鼻のいぶきとによって、

一九 海の底はあらわれ、

二〇 世界の基が、あらわになった。

二一 彼は高き所から手を伸べてわたしを捕え、

二二 大水の中からわたしを引き上げ、

二三 わたしの強い敵と、わたしを憎む者とから

わたしを救われた。

二四 彼らはわたしにとって、あまりにも強かったからだ。

二五 彼らはわたしの災の日

二六 わたしにわたしの日にわたしの、たち向かった。

二七 しかし主はわたしの支柱となられた。

二八 彼はまたわたしを広い所へ引きだされ、

二九 わたしを喜ばれて、救ってくださった。

三〇 主はわたしの義にしたがってわたしに報い、

三一 わたしの手の清きにしたがって

三二 わたしに報いかえされた。

三三 それは、わたしが主の道を守り、悪を行わず、

三六 わが神から離れたことがないからである。

三七 そのすべてのおきてはわたしの前にあって、

三八 わたしはその、み定めを離れたことがない。

二四 わたしは主の前に欠けた所なく、自らを守って罪を犯さなかった。

二五 それゆえ、主はわたしの義にしたがい、その目のまえにわたしの清きにしがって、

わたしに報いられた。

二六 忠実な者には、あなたは忠実な者となり、

欠けた所のない人には、

あなたは欠けた所のない者となり、

二七 清い者には、あなたは清い者となり、

まがった者には、かたいぢな者となられる。

二八 あなたはへりくだる民を救われる、

しかしあなたの目は高ぶる者を見て

これをひくくせられる。

二九 まことに、主よ、あなたはわたしのともし火、

わが神はわたしのやみを照される。

三〇 まことに、あなたによって

わたしは敵軍をふみ滅ぼし、

わが神によって石がきをとび越えることができる。

三一 この神こそ、その道は非のうちどころなく、

主の約束は真実である。

彼はすべて彼に寄り頼む者の盾である。

三二 主のほか、だれが神か、

われらの神のほか、だれが岩であるか。

三三 この神こそわたしの堅固な避け所であり、

わたしの道を安全にされた。

三四 わたしの足をめじかの足のようにして、

わたしを高い所に安全に立たせ、

三五 わたしの手を戦いに慣らされたので、

わたしの腕は青銅の弓を引くことができる。

三六 あなたはその救の盾をわたしに与え、

あなたの助けは、わたしを大いなる者とされた。

三七 あなたはわたしが歩く広い場所を与えられたので、

わたしの足はすべらなかった。

三八 わたしは敵を追って、これを滅ぼし、

これを絶やすまでは帰らなかった。

三九 わたしは彼らを絶やし、彼らを砕いたので

彼らは立つことができず、わたしの足もとに倒れた。

四〇 あなたは戦いのために、わたしに力を帯びさせ

わたしを攻める者をわたしの下にかがませられた。

四一 あなたによって、敵は

そのうしろをわたしに向けたので、

わたしを憎む者をわたしは滅ぼした。

四二 彼らは見まわしたが、救う者はいなかった。

彼らは主に叫んだが、彼らには答えられなかった。

四三 わたしは彼らを地のちりのように

細かに打ちくだき、

ちまたのどろのよう、踏みじった。

四四 あなたはわたしを国々の民との争いから救い出し、

わたしをもろもろの国民のかしらとされた。

わたしの知らなかった民がわたしに仕えた。

四五 異国の人たちはきてわたしにこび、

わたしの事を聞くとすぐわたしに従った。

四六 異国の人たちは、うちしおれて

その城からふるえながら出てきた。

四七 主は生きておられる。わが岩はほむべきかな。

わが神、わが救の岩はあがむべきかな。

四八 この神はわたしのために、あだを報い、

もろもろの民をわたしの下に置かれた。

四九 またわたしを敵から救い出し、

あだの上にわたしをあげ、

暴虐の人々からわたしを救い出された。

五〇 それゆえ、主よ、わたしはもろもろの国民の中で、

あなたをたたえ、

あなたの、み名をほめ歌うであろう。

五一 主はその王に大いなる勝利を与え、

油を注がれた者に、ダビデとその子孫とに、

とこしえに、いつくしみを施される」。

二三章 「これはダビデの最後の言葉である。

エッサイの子ダビデの託宣、

すなわち高く挙げられた人、

ヤコブの神に油を注がれた人、

イスラエルの良き歌びとの託宣。

二「主の霊はわたしによって語る、

その言葉はわたしの舌の上にある。

三 イスラエルの神は語られた、

イスラエルの岩はわたしに言われた、

『人を正しく治める者、

神を恐れて、治める者は、

朝の光のように、

雲のない朝に、輝きでる太陽のように、

地に若草を芽ばえさせる雨のように人に臨む』。

五まことに、わが家はそのように、

神と共にあるではないか。

それは、神が、よろず備わって確かな

とこしえの契約をわたしと結ばれたからだ。

どうして彼はわたしの救と願いを、

皆なしとげられぬことがあるうか。

六しかし、よこしまな人は、いばらのようで、

手をもって取ることができないゆえ、

みな共に捨てられるであろう。

七これに触れようとする人は

鉄や、やりの柄をもって武装する、

彼らはことごとく火で焼かれるであろう」。

八ダビデの勇士たちの名は次のとおりである。タクモン

びとヨセブ・バツセベテはかの三人のうちの長であつ

たが、彼はいちじに八百人に向かつて、やりをふるい、

それを殺した。

彼の次はアホアびとドドの子エレアザルであつて、三勇士のひとりである。彼は、戦おうとしてそこに集まつたベリシテびとに向かつて戦いをいどみ、イスラエルの人々が退いた時、ダビデと共にいたが、立ってベリシテびとを撃ち、ついに手が疲れ、手がふるぎに着いて離れないほどになった。その日、主は大いなる勝利を与えられた。民は彼のあとに帰ってきて、ただ殺された者をはぎ取るばかりであつた。

二彼の次はハラルびとアゲの子シャンマであつた。あつた時、ベリシテびとはレヒに集まつた。そこに一面にレンズ豆を作つた地所があつた。民はベリシテびとの前から逃げたが、三彼はその地所の中に立って、これを防ぎ、ベリシテびとを殺した。そして主は大いなる救を与えられた。

三三十人の長たちのうちの三人は下つて行つて刈入れのところに、アドラムのほら穴にいるダビデのもとにきた。時にベリシテびとの一隊はレバイムの谷に陣を取つていた。四その時ダビデは要害におり、ベリシテびとの先陣はベツレヘムにあつたが、一五ダビデは、せつに望んで、「だれかベツレヘムの門のかたわらにある井戸の水をわたしに飲ませてくれるとよいのだが」と言つた。一六そこでその三人の勇士たちはベリシテびとの陣を突き通つて、ベツレヘムの門のかたわらにある井戸の水を汲み

取つて、ダビデのもとに携えてきた。しかしダビデはそれを飲もうとはせず、主の前にそれを注いで、「一七言つた、主よ、わたしは断じて飲むことをいたしません。いのちをかけて行つた人々の血を、どうしてわたしは飲むことができましよう。こうして彼はそれを飲もうとはしなかつた。三勇士はこれらのことを行つた。

一八ゼルヤの子ヨアブの兄弟アビシヤイは三十人の長であつた。彼は三百人に向かつて、やりをふるい、それを殺した。そして、彼は三人と共に名を得た。一九彼は三十人のうち最も尊ばれた者で、彼らの長となつた。しかし、かの三人には及ばなかつた。

二〇エホヤダの子ベナヤはカブジエル出身の勇士であつて、多くのてからを立てた。彼はモアブのアリエルのふたりの子を撃ち殺した。彼はまた雪の日に下つていつて、穴の中でししを撃ち殺した。三彼はまた姿のうるわしいエジプトびとを撃ち殺した。そのエジプトびとは手にやりを持っていたが、ベナヤはつえをとつてその所に下つていき、エジプトびとの手からやりをもぎとつて、そのやりをもつて殺した。三エホヤダの子ベナヤはこれらの事をして三勇士と共に名を得た。三三彼は三十人のうちに有名であつたが、かの三人には及ばなかつた。ダビデは彼を侍衛の長とした。

三四三十人のうちにあつたのは、ヨアブの兄弟アサヘル。ベツレヘム出身のドドの子エルハナン。三五ハロデ出身の

シヤンマ。ハロデ出身のエリカ。^{二六}バルテびとヘレヅ。テコア出身のイッケシの子イラ。^{二七}アナトテ出身のアビエゼル。^{二八}ホシャびとメブンナイ。^{二九}アホアびとザルモン。ネトバ出身のマハライ。^{三〇}ネトバ出身のパアナの子ヘレブ。^{三一}ベニヤミンびとのギベアから出たりバイの子イッタイ。^{三二}ピラトンのベナヤ。ガアシの谷出身のヒダイ。^{三三}アルバテびとアビアルボン。パホルム出身のアズマウテ。^{三四}シヤルボン出身のエリヤバ。ヤセンの子たち。ヨナタン。^{三五}ハラルびとシヤンマ。ハラルびとシヤラルの子アヒアム。^{三六}マアカ出身のアハスパイの子エリペレテ。ギロ出身のアヒトベルの子エリアム。^{三七}カルメル出身のヘツロ。アルバびとバアライ。^{三八}ゾバ出身のナタンの子イガル。ガドびとバニ。^{三九}アンモンびとゼレク。ゼルヤの子ヨアブの武器を執る者、ベエロテ出身のナハライ。^{四〇}イテルびとイラ。イテルびとガレブ。^{四一}ヘテびとウリヤ。合わせて三十七人である。

第二四章 主は再びイスラエルに向かって怒りを発し、ダビデを感動して彼らに逆らわせ、「行ってイスラエルとエダとを数えよ」と言われた。^一そこで王はヨアブおよびヨアブと共にいる軍の長たちに言った、「イスラエルのすべての部族のうちを、ダンからベエルシバまで行き巡って民を数え、わたしに民の数を知らせなさい」。^二ヨアブは王に言った、「どうぞあなたの神、主が、民を今よりも百倍に増してくださいますように。そして

王、わが主がまのあたり、それを見られますように。しかし王、わが主は何ゆえにこの事を喜ばれるのですか」。^三しかし王の言葉がヨアブと軍の長たちとに勝ったので、ヨアブと軍の長たちとは王の前を退き、イスラエルの民を数えるために出て行った。^四彼らはヨルダンを渡り、アロエルから、すなわち谷の中にある町から始めて、ガドに向かい、ヤゼルに進んだ。^五それからグレアドに行き、またヘテびとの地にあるカデシに行き、それからダンに至り、ダンからシドンにまわり、^六またツロの要害に行き、ヒビびと、およびカナンびとのすべての町に行き、エダのネゲブに出てベエルシバへ行った。^七こうして彼らは国をあまねく行き巡って、九か月と二十日を経てエルサレムにきた。^八そしてヨアブは民の総数を王に告げた。すなわちイスラエルには、つるぎを抜く勇士たちが八十万あった。ただしエダの人々は五十万であった。^九しかしダビデは民を数えた後、心に責められた。そこでダビデは主に言った、「わたしはこれをおこなって大きな罪を犯しました。しかし主よ、今どうぞしもべの罪を取り去ってください。わたしはひじょうに愚かなことをいたしました」。^{一〇}ダビデが朝起きたとき、主の言葉はダビデの先見者である預言者ガデに臨んで言った、「三行ってダビデに言いなさい、『主はこう仰せられる、わたしは三つのことを示す。あなたはその一つを選ぶがよい。わたしはそれをあなたに行うであろう』と」。

三 ガデはダビデのもとにきて、彼に言った、「あなたの国に三年のききんをさせようか。あなたが敵に追われて三か月前の前に逃げるようにしようか。それとも、あなたの国に三日の疫病をおくろうか。あなたは考えて、わたしがどの答を、わたしをつかわされた方になすべきかを決めなさい」。

四 ダビデはガデに言った、「わたしはひじょうに悩んでいます。主のあわれみは大きいゆえ、われわれを主の手に陥らせてください。わたしを人の手には陥らせないでください」。

五 そこで主は朝から定めの時まで疫病をイスラエルに下された。ダンからベエルシバまでに民の死んだ者は七万人あった。六 天の使が手をエルサレムに伸べてこれを滅ぼそうとしたが、主はこの害悪を悔い、民を滅ぼしてゐる天の使に言われた、「もはや、じゅうぶんである。今あなたの手をとどめるがよい」。その時、主の使はエブスびとアラウナの打ち場のかたわらにいた。七 ダビデは民を撃っている天の使を見た時、主に言った、「わたしは罪を犯しました。わたしは悪を行いました。しかしこれらの羊たちは何をしたのですか。どうぞあなたの手をわたしとわたしの父の家に向けてください」。

八 その日ガデはダビデのところに来て彼に言った、

「上って行ってエブスびとアラウナの打ち場で主に祭壇を建てなさい」。

九 ダビデはガデの言葉に従い、主の命じられたように上って行った。一〇 アラウナは見おろして、王とそのしもべたちが自分の方に進んでくるのを見たので、アラウナは出てきて王の前に地にひれ伏して拝した。

一一 そしてアラウナは言った、「どうして王が主は、しもべの所にこられましたか」。ダビデは言った、「あなたから打ち場を買い取り、主に祭壇を築いて民に下る災をとどめるためです」。

一二 アラウナはダビデに言った、「どうぞ王、わが主のよいと思われる物を取ってささげてください。燔祭にする牛もあります。一三 王よ、アラウナはこれをごとく王にささげます」。アラウナはまた王に、「あなたの神、主があなたを受け入れられますように」と言った。

一四 しかし王はアラウナに言った、「いいえ、代価を支払ってそれをあなたから買い取ります。わたしは費用をかけずに燔祭をわたしの神、主にささげることはしません」。こうしてダビデは銀五十シケルで打ち場と牛とを買い取った。一五 ダビデはその所で主に祭壇を築き、燔祭と酬恩祭をささげた。そこで主はその地のために祈を聞かれたので、災がイスラエルに下ることはとどまった。